7

伊丹城跡発掘調査報告書Ⅲ

昭和53年3月

伊丹市教育委員会

序

昭和50・51年度の２次にわたる発掘調査をうけ、今年度は、盛夏の７月から９月初めにかけて、炎天下の２ヵ月余にわたり、伊丹城跡第３次発掘調査を実施しました。

第２次発掘調査を経て、城跡の北西部に位置する推定本丸跡については、保存に向けて大きく一歩をふみ出しました。しかしながら、その南の仮称「西郭」地区については、保存を断念し、当初の工事計画通りに台地の全面削平を前提として第３次発掘調査を始めざるを得ませんでした。

ところが「西郭」地区で検出された遺構は、伊丹城跡の複雑な変遷過程をつぶさに伝えており、これまた遺構の現地における保存の必要性が強く認識されるに至りました。

故伏見正慶前市長の遺志を継いで、矢埜與一新市長は、この調査成果を前に、並々ならぬ決意をもって、国鉄伊丹駅前整備事業計画の全面的再検討と、伊丹城跡全域の保存についての検討を指示されることになりました。

事業計画の立案から十数年を経て今日に至っていることを思えば、地元の市民の方々をはじめとする関係者各位に及ぼす影響は、はかり知れないものがあります。あえてこの挙に出られた市長の文化財保存に対する熱意を十二分に生かしつつ、市民のみなさんの全面的なご協力を得て、遺跡保存のための具体的な方策を実施していきたいと考えます。

このようなときにあたり、第３次発掘調査の報告書を発刊し、市民のみなさんにご報告できますことは、鈴木先生をはじめとする調査団および関係者の方々のご努力とご協力の賜物と、厚く感謝いたします。

昭和53年３月31日

伊丹市教育長　佐　坂　茂　男

目　　次

Ⅰ　発掘調査の経過……1
　1．調査の組織
　2．調査の経過
Ⅱ　遺構の解説……2
Ⅲ　遺構の考察……5
　遺構図面……6
Ⅳ　遺　　物……10
　1．遺物の解説
　2．遺物観察表
　　(1)　土　器
　　(2)　銭　貨
　遺物実測図……38
Ⅴ　図　　版……45
　1．遺構写真
　2．遺物写真

凡　　例

本報告書は、伊丹市教育委員会が国鉄伊丹駅前整備事業に伴なう事前調査として400万円で行った昭和52年度伊丹城跡発掘調査の報告書である。本報告書の執筆は伊丹城跡調査団が担当した。Ⅰを橋本　久、Ⅱ・Ⅲを鈴木　充、Ⅳを浅岡俊夫が分担した。図は鈴木　充・浅岡俊夫が作成し、写真は遺跡を鈴木　充、遺物を浅岡俊夫が撮影した。

伊丹城跡発掘調査報告書Ⅲ

Ⅰ　発掘調査の経過

1．調査の組織

伊丹城跡第3次発掘調査は、昭和52年度に、伊丹市費400万円をかけ、伊丹市教育委員会が行なった。調査にあたっては、調査委員に鈴木　充（広島大学教授）を委嘱し、調査員として橋本　久（大阪経済法科大学助教授）・中田興吉（辰馬考古資料館学芸員）・迫垣内　裕（広島大学大学院・建築史）、遺物整理に浅岡俊夫の参加を得た。また、事務は伊丹市教育委員会社会教育課（課長柳　正夫・係長木原　務・主任坂根憲治）が担当した。調査は主として伊丹近郊に在住する学生の手によって行なったが、伊丹市建設部都市整備課・神戸大学考古学研究会・大阪経済法科大学考古学研究会・笹原ライオンズクラブなどの協力を得、地元の大手町自治会（会長吉田昌功）や伊丹市文化財保存協会・伊丹地方史学会・伊丹市記者クラブ・株式会社橋本工務店および森本建設などから、さまざまな形で援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

調査参加者　野崎　彰・前田英治・峯崎隆雄・大木本貞人・平田精一・黒田慶一・三宅啓正・上田美智子・安木久和・河井博行・西野昌則・吉富　守・東野伸昭・大橋裕明・原　弘司・表野慎二・浦田ルミ・高橋美智・藤田武夫・山本隆春・福田　薫・広田清雄・早川　譲・坪井達也・藤森幹治・荒金　毅・橘　伸二・田中恵二・伊沢勝彦・田中稔子・石田裕美・山本佐智子・古田孝司・吉村悦子・赤尾昌子・安達典孝・竹村　誠・宗林　正・林　哲也・本井　勝・白井勝進・徳田彦次・置村康彦・楠田　昌・松本秀彦・眞鍋雅治　（順不同）

2．調査の経過

第3次発掘調査の対象地は、国鉄伊丹駅前を西にのびる道路の南側で、第2次発掘調査を行なった区域に南接する旧荒村寺の敷地、およびその南に接する、第1次発掘調査で未掘の旧大手町自治会館の跡地であった。この地区全体を、昨年度にひきつづいて、西郭地区と仮称した。

調査地は、第1次・第2次発掘調査の経験から、全体に厚く盛り土が施されていることが知られていたため、厚さ40～60cmの表土を、パワーシャベルで排出したのち、手掘りを行なった。

現地での調査期間は、7月2日から9月6日まで2ヵ月余を要した。作業の進行状況は、おおむね下記の通りである。

7月　2　日　作業開始。草刈り。西郭地区に3m間隔に地区設定。

3　日～　8日　西郭の中央部・西部・東部・南部の順に、パワーシャベルおよびダンプカーにより、表土を掘削し搬出。

4　日　西郭西部の遺構検出。南北に走る西辺の土塁跡の一部。

11日　西郭東部の遺構検出。出土遺物の水洗い開始。

１７日　西郭中央で南北に走る石垣を検出。その東にも南北に走る石列を検出。池の汀か。

１８日　西郭南部（旧自治会館跡）の遺構検出。

２０日　西郭南部で東西に走る石垣を検出。土塁の北側裾留めか。

8月　9　日　調査地全域の遺構検出完了。

１０日～１１日　写真撮影の準備・清掃。

１２日　写真撮影。

１３日　現地説明会。参加者275名。

１４日～15日　実測準備。

１６日　実測開始。

9月　5　日　実測完了。

6　日　略埋戻し。用具撤収。現地調査終了。

なお調査地は、国鉄伊丹駅前整備工事のため、調査終了後にひきつづき土取り工事が行なわれる予定であったので、埋戻し作業を考慮していなかった。しかし検出した遺構の重要性に鑑み、遺構の現地保存の可能性も生じてきたため、おもな遺構には砂を入れた。また調査地の全周には仮設の柵を設け、将来の保存計画に備えている。

出土した遺物の整理作業は、調査現場で洗浄・仮整理を行なったあと、伊丹市立博物館に搬入し、おもな遺物の実測・撮影を実施した。

Ⅱ　遺構の解説

１．調査地区の地形

昭和52年度に第３次伊丹城跡発掘調査にとりあげた地区は、第２次調査で行なった西郭地区の南に当る地域である。この場所は永らく荒村寺の境内になっていたところで、国鉄伊丹駅前整備事業によって荒村寺が移転したので、その跡地の地下調査を行ったわけである。荒村寺は浄土宗の寺であるが、現在のように寺観を整えたのは明治維新以後であり、それまでは城跡の小高い丘の上に行者堂が営まれていたという。

荒村寺跡は東西に長い敷地で、東側の半分に庫裡が建ち、西側に墓地があった。この墓地にあたるところは、もとは高さ５ｍあまりの小高い台地であり、子供たちが登りおりして遊んでいたことを記憶している古老もある。墓地の西は高さ２ｍあまりの崖があり、その西はほぼ平坦になって、民家の敷地が続いている。土地は東に向うほどに低くなり、東端で３ｍ余りの切立った崖になっているが、これは伊丹城の遺跡とは何の関係もなく、城跡を開さくして通した福知山線の伊丹駅に下る道路をつけるために掘取られたものである。

今回の調査地の北側は52年第２次発掘調査で、村重時代に作られた石造美術品が混入した溝と、伊丹城時代の礎石を使った建物の跡が確認されている。また、南側は51年第１次調査の際に、少し南へ隔たった位置に、東西に通る大きな濠が検出されている。

2．調査の状況

第３次調査の予定地は、北側の第２次調査地では上方約60cmは攪乱された層であり、西側には更に深さ80cmぐらいの池状の窪地があり、その窪地に向って中程から西へ向う溝が設けられていた。また、第１次調査を行った南側は、深さ１ｍぐらいの厚いバラス層があり、その下から、室町時代と思われる三層の遺構面を検出した。

以上のような状況から判断して、第３次調査地はかなり厚い攪乱層があり、また、第３次調査で検出した西端の溝の続きがあるものと考え、表土層約60cmをパワー・シャベルで除去したが、その際、北西の溝の延長と考えた部分では、室町時代末期に築いたと思われる土塁を掘込み、それ以前の遺構面近くまでを機械力で排土してしまった。調査結果には何の支障もきたさなかったものの、深層遺構の検出に利用する機械力の問題の難しさを思い知らされた。

調査の第一段階では、まず荒木村重時代の遺構の検出に主眼を置いたが、第３次調査で検出した石造美術品を混入した南北溝は、３次調査で検出した少し南で消滅し、そこから南は地盤面が高くなり、３～４ｍほど南に行って再度低くなっており、前出の溝はあまり長いものではないことが確認された。

この溝と同時期と思われる遺構は、西方７ｍほどのところから検出された大きな川原石の列と、すこし南でうねりながら南々東へ長く続く小さな川原石の列である。北側の大きな川原石の列は、それ自体が火にあっている上に置かれている地盤面そのものも火災にあっており、焼土層の中に焼米を多量に含んでいる。石自体は長径が60cmほどあるものもあり、東側に面し、高低は多少不揃いな形で並んでいる。

南側に続く石列は、10～30cm大の小石を一列に並べたものであり、東側の面を揃えて並べてある。この石列を挟んで西側は盛土が高くあげられ、その表面に５～10cm大の石が並んだところが部分的に残っている。その石の並びは、一見したところ洲浜状であるが、それほど整ったものではない。石列の東側にも同様に洲浜状の石が幅７ｍぐらいにわたって散在しており、全体に石の並びが不揃いであり、西で高く、東へ行くほど低く、石も疎になってゆくところから、この洲浜状の石は西側の高い斜面にあった石が落込んで出来たものとも見なせるが、他の土留石のまわりではみられないので、土塁の裾止めに沿って洲浜状に石を置き、庭園の施設として使われたものと考えた。

第３次調査地で、村重時代のものと思われる遺構は上述のものだけであった。そこで、伊丹城時代の遺構を調べるため、第２次調査で検出した礎石建物と同じ深さまで、遺構検出面をさげて精査を行った。その結果、第２次調査時の礎石建物群は南の方には続いてなく、南10ｍぐらいの所で、建物の柱筋とは異なる方向に、礎石としても使える石が一列並んでいるものが検出された。この石列に見合う両側は、精査したにもかかわらず、対になるものは見当らず、塀状のものが設けられていたものと考えたが、礎石は地表面に直接置かれているだけなので、その抜取跡を検出するのは難かしく、建物の可能性が全くないわけではない。

伊丹城時代の遺構は、これまでの間は比較的しっかりとした厚60cmぐらいの整地層に乗っている

が、塀から南の方は地盤面がさがり、焼土、焼炭を含む粗雑な整地層の上に薄く山砂をまいた地盤面に20～30cmぐらいの川原石を散在させていた。これらの川原石は一面が平坦になる形のものが多く、北側の状況から考えて、建物の礎石として使用された可能性が強い。しかしながら、その位置や高さはまったくまとまりがなく、後世にかなり著しい改変を受けたか、さもなければ、焼土などの廃土とともに、古い礎石が放り込まれたような状態を示していた。そのうち、比較的まとまりのあるものが、中央部で検出された桁行３間の廊状の建物であるが、それも水平面の保持が甘く、確実に上屋が乗っていたと断定できない状態であった。結局のところ、この地区については、焼跡を粗雑に整地し、礎石を使った建物群を建てた跡が再度、整地で攪乱され、旧状が判らなくなったものとみなされる。

この焼土整地層は、西側では洲浜状の石の下に入りこみ、村重時代の土塁裾止石列の一段下に達している。この一段下の石は、いずれも火災に遭っており、村重の有岡城では、旧伊丹城の土塁裾上石を利用し、その上に石を一段積み、それに沿って洲浜を設けたものと思われる。

一方、東側の焼土層の下は地山に達しており、上部の遺構に関係のない所で、断続的に上面を削って調べたが、掘立柱を含めて、確実な構築物の跡は発見されなかった。また、この地山は北東部で急激に低くなり、古くは（伊丹氏の居館時代）東側に池があったのではないかと思われるが、先方が全面的に削り取られているので、断定的な資料は得られなかった。

つぎに、土塁に関しては、いくつかの時期にわたっての資料が得られた。まず、西北部では、東面して南北に連なる石列が検出され、石段の最下級に当るものと考えられた。一方、先に述べた村重時代の土塁裾止めの西約３ｍのところから、高さ約60cm、川原石を３～４段積んだ石垣が一直線に続いており、その東側の表土面は石段東側の表土面と同じ高さであった。この石垣は火災には遭っておらず、使用中に下方が埋っていたものと推測される。

石段の西は約６ｍぐらい隔たって、再び地盤面が高くなるが、この部分は地山面に焼面があり、性格ははっきりしないが、この部分に入口的な装置が設けられたものと考えられる。また、石段の南側の石は焼土面の上に乗っており、この焼土は村重時代の土留と思われる石の下を通り、真南にほぼ直線状に連続している。この焼面はかなり厚く、西の方で急に立ちあがって切れており、かっては西側に急な斜面があり、それが削平されたために生じたものと考えられた。

この焼面は東の方では石段に連続する石垣の下で切断され、更に東の方へ続いていたものと考えられる。また、この面から多量の焼米が出土している。また、焼面自身は更に南の方へ続き、もとの荒村寺の敷地を越え、第１次調査で発掘することができなかったもとの自治会館跡にまで達している。この部分では焼面は緩く東へ曲りこみ、そこから約４ｍほど隔てて、比較的大きな石を湾曲して積んだ面が出土した。この面は火災にはまったく遭っておらず、先の焼面に先行する土塁の土留に当るものと思われる。

一方、これらの土塁の土留と考えられる装置は、いずれもその西、または南側に盛土が置かれているが、旧荒村寺境内の南西では、地山が高く盛りあがり、伊丹城築城以前から、小山状の盛上り

があったものと考えられる。

Ⅲ　遺構の考察

伊丹城跡の第３次調査で検出した遺構は、主として城跡の南西角を占める土塁の痕跡であった。この土地は、まず、伊丹氏の居館時代（応仁乱の直後ぐらいまで）には、南西部に小山が盛り上った地形であり、東の方の、現在国鉄伊丹駅に至る道路あたりは、かなり低くなり、池状になっていたものと考えられる。

つぎに、この小山状の高台に盛土を続ぎ足して土塁を築いたものと考えられるが、その幅は約12mもあるかなり広いものであった。土塁の内側は裾の土留としてかなり大型な石を並べているが、年月がたつ内に、土塁の土がかなり崩れ落ち裾の部分が２ｍから４ｍぐらい東側へ広がり、その部分が通路として使われていたようである。そのような状態で土塁は一度火災に遭うが、その時期は恐らく永正16年の伊丹城の第１回目の落城の時期に当るものと考えられる。

つぎの時期は恐らく第２次調査で検出した礎石建物に見合う時期であり、この時期に土塁の裾は更に東へ２ｍほど延長され、高さ60cmほどの石垣が土塁の裾を固める土留として用いられた。また、礎石建物の南端西寄の部分に石段が設けられているところから考えて、その西側で土塁を切って、門などの入口が設けられていたものであろう。この時期の遺構は火災には遭っておらず、恐らく高畑甚九郎が伊丹城を占居した時代に当るものと考えられる。

次の時期は伊丹城としては最後の時期で、土塁の土留は東に大きく膨れ出し、川原石を２段に積み、東側には洲浜状に挙大の石を並べている。あるいは土塁の角の部分に矢倉を築いていたのかも知れない。東側は焼土面を粗く整地をして礎石を使った建物を建てていたようであるが、後に攪乱されて建物の形ははっきりしない。北側の礎石建物はこの時期も用いられ、入口は前期からの西入口を使用していたものと考えられる。

最上層にある荒木村重の有岡城跡では、土塁の形は伊丹氏時代のものをそのまま踏襲しており、裾の土留として更に石を一段積みあげている。この土留あたりは挙大の石を並べて洲浜状にし、全体を盛土して庭園を設けていたものと思われるが、削平が著しいため、具体的な形はわからない。入口としては前期からの西入口をそのまま使用していた。

今回の調査の結果、村重の時代も西郭の南側に高い土塁を設けていたことがはっきりした。これから、第１次調査で検出した内堀は、伊丹城時代は城郭の南限であり、外堀として周囲を囲んでいたものと推測される。村重の有岡城にあっても、この堀はそのまま利用していたようであり、第１次調査で検出した南郭の遺構は、伊丹氏時代の遺物がほとんど出ないところから、荒木村重によって有岡城の二ノ丸として新しく築かれたものではないかと考えられる。

伊丹城は、もともと伊丹氏の居館であったものを、応仁の乱以後、諸国で打続いた戦乱に対処するため、周囲に濠を堀り、土塁を築いて城郭化したものであるが、その基本的な形は荒木村重の有岡城でも踏襲されていたのである。

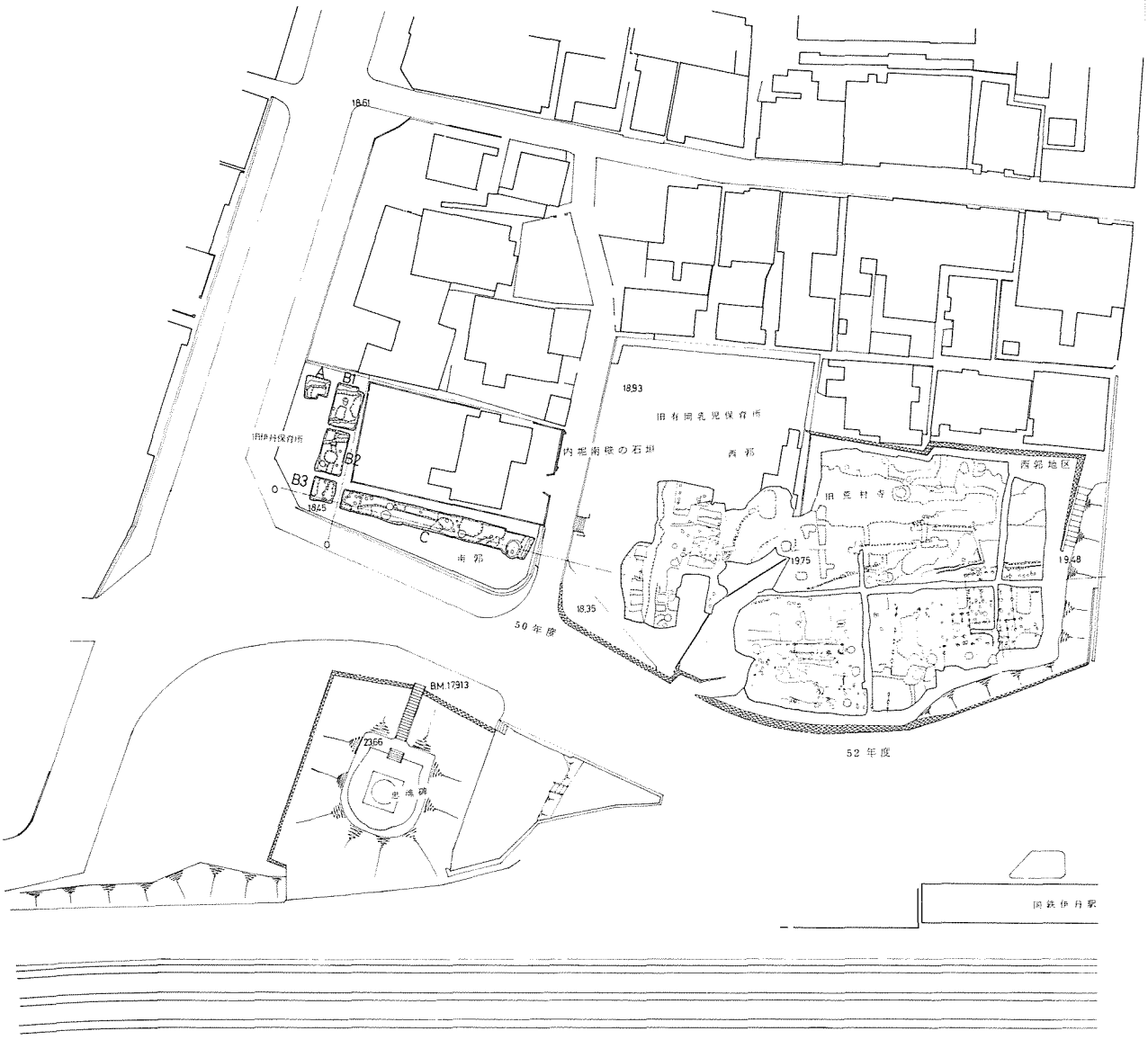
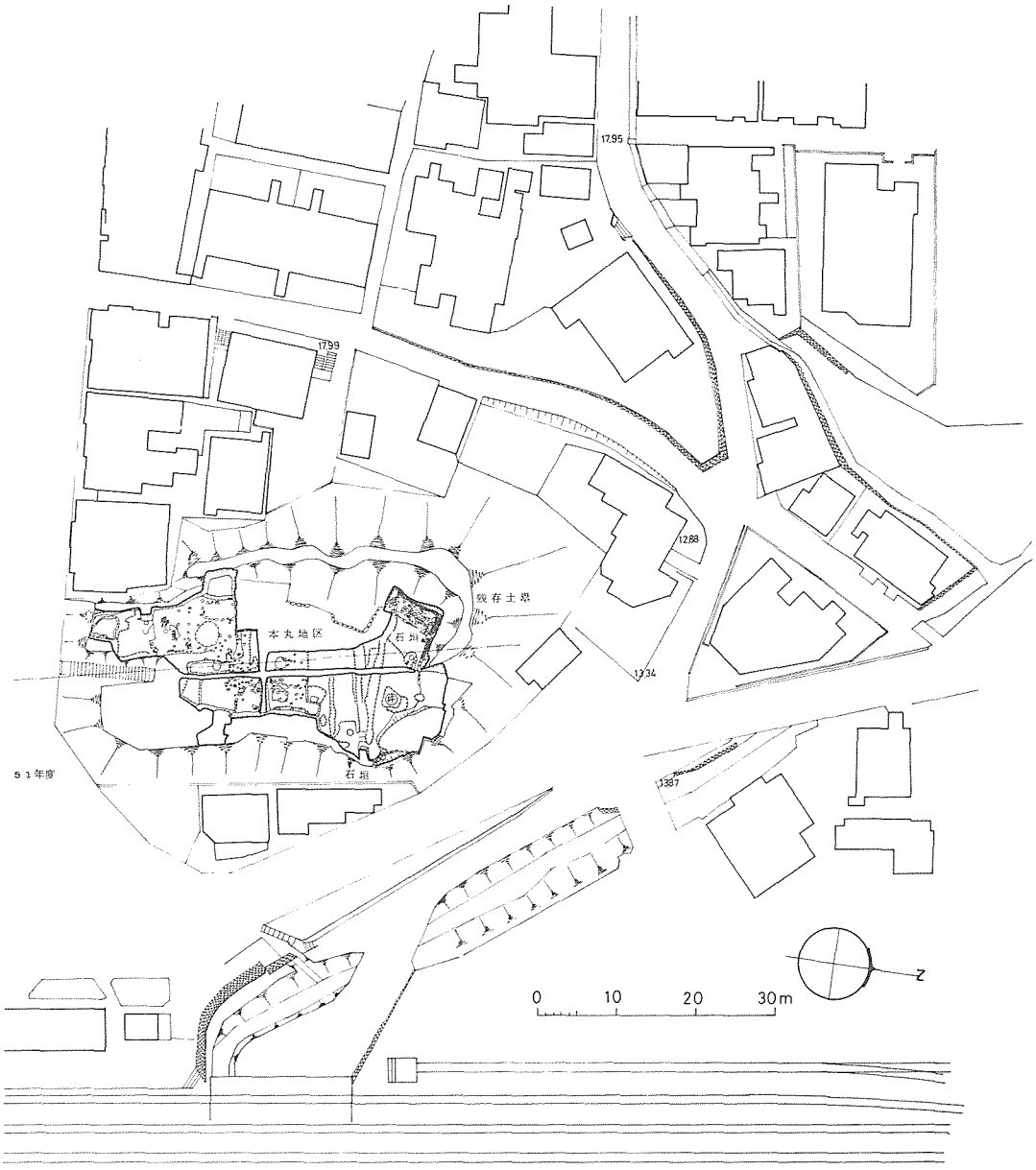

18.61
A
B1
B2
B3
18.25
旧伊丹保育所
18.93
旧有岡乳児保育所
内堀南端の石垣
西郭
南郭
西郭地区
旧長村寺
19.75
19.68
18.35
50年度
52年度
BM 17.913
17.366
忠魂碑
阪急伊丹駅

図1　調査地区図


17.95
17.99
12.88
残存土塁
本丸地区
石垣
13.34
石垣
13.87
51年度
0
10
20
30m
N

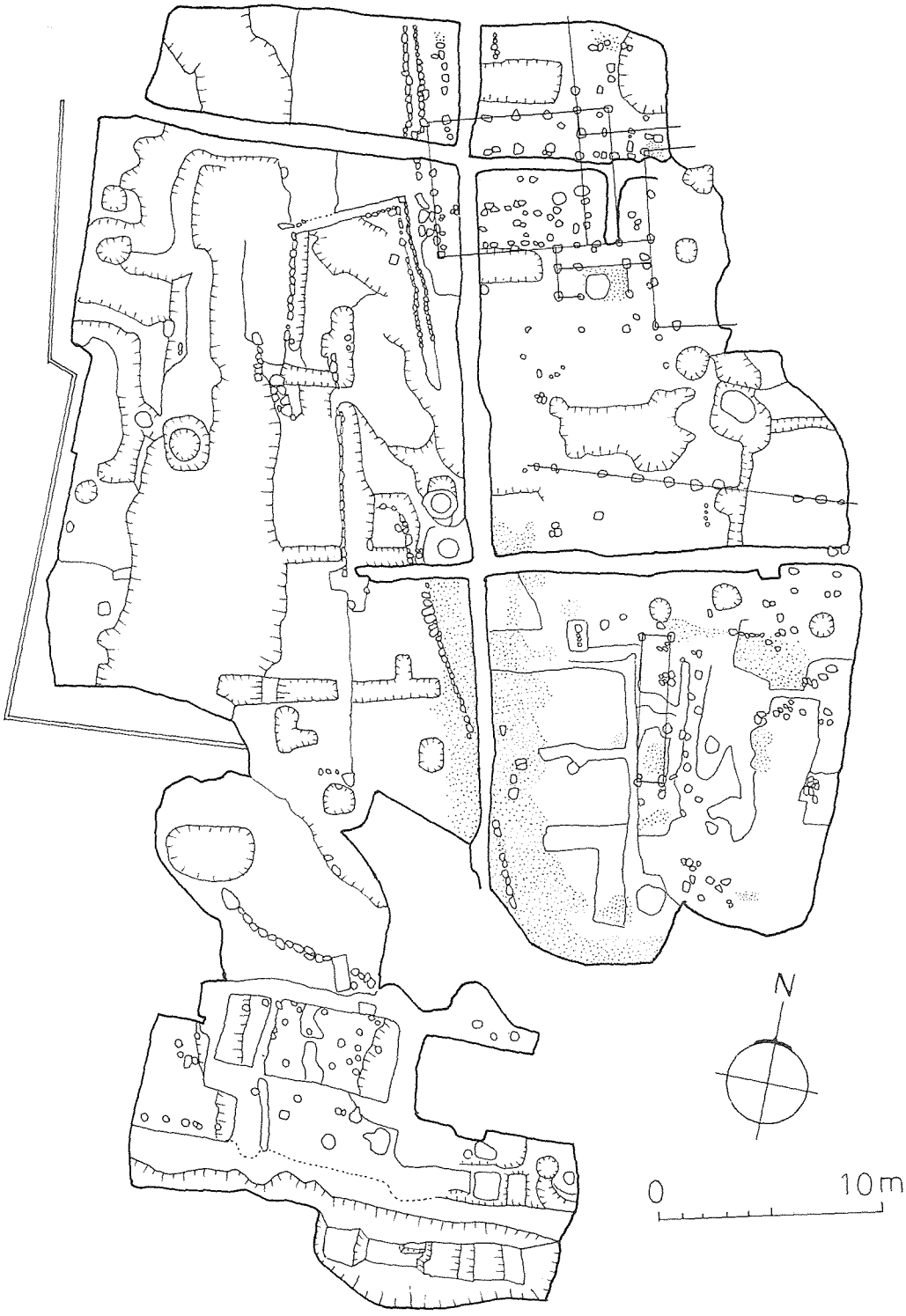
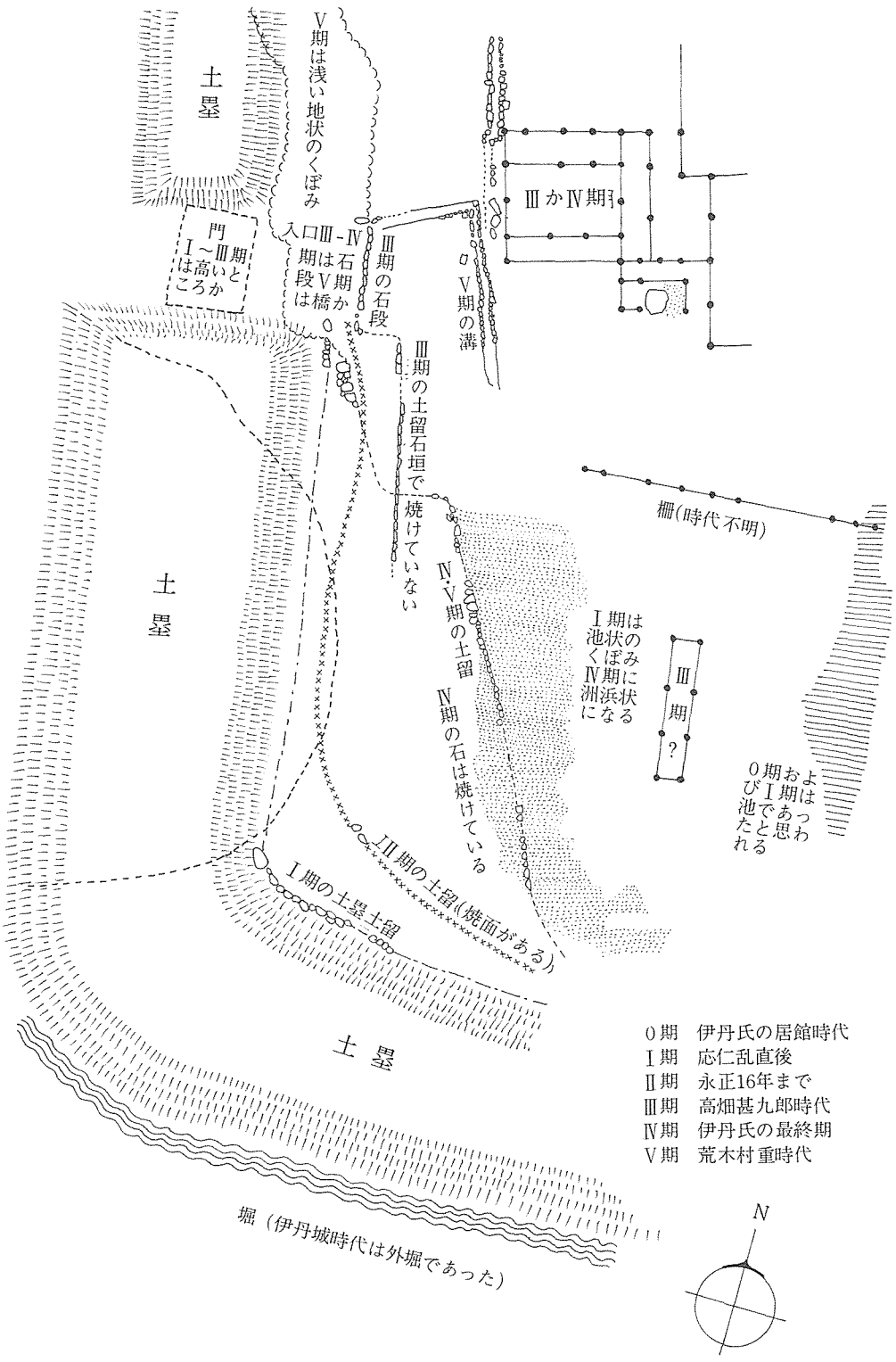


図2　伊丹城西郭実測図



図面3　伊丹城変遷推定図

Ⅳ　遺物

第３次調査で出土した遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶器類、磁器類、瓦類、石製・石造品、銭貨、金属製品等であるが、時代については古墳時代から近代までの広範囲にわたっている。今回は、主に伊丹城時代に関する土器類について整理を行なった。

遺物の中で図示したものについては通し番号(1～148)を、図示できず写真のみの遺物については200番台の番号を付した。

１．遺物の解説

(1). 土師質土器

鉢、羽釜、筒状土器、皿類が出土しているが、大部分は皿類である。

a．　皿類（１～33）

一般的には灯明皿と呼ばれる類であり、整理の都合上三つのタイプに分類した。

○小皿　　口径７～８cm前後で、手づくね成形ののち、口縁部に軽く横ナデによる仕上げ調整を施すものもあるが、手づくねの痕跡が体部から口縁部にかけてそのまま残り、凹凸激しく口径のひずみも大きく、器壁が厚い。（１～19）

底内面周縁に強い横ナデを時計回りに１回施すものがある。（3.4.6.7.8.13.14.）

○中皿　　口径10cm前後で、手づくね成形ののち、口縁部の仕上げ調整がていねいで大皿の口縁部形態と同じ形態をもつものもあり、口径のひずみも小さい。体部には手づくねの痕跡が残る。底内面周縁に圏線をもつもの(22)や、強い横ナデを時計回りに１回施すもの(25.26）もある。(20～28)

○大皿　　口径12cm前後以上で、体部から口縁にかけて仕上げ調整が非常にていねいで、体部の手づくね痕もほとんど認められない。(33)以外は、底内面周縁に圏線をもつ。(29～33)

b．杯（34）

一個体のみ出土し、口縁部を強い横ナデで調整している。体部内面に細いヘラによる線刻を２本認める。

c．碗（35）

一個体のみ出土し、高台をもつ。精選された胎土であるが、焼成はやわらかい。

d．鉢（36）

非常に良好な成形で、体部外面にヘラ削り痕をかすかに認める。外面は漆黒色の光沢をもつ程つるつるにみがかれており、内面には細かいヘラ削り痕が認められる。

e．羽釜（37.38）

数個体出土しているが、大部分が破片のため特徴が把握できるのは２・３個体にすぎない。口縁部がわずかに内傾しながら直線的に立ち上がり、胴のはりはない。内面は強弱のハケ調整を行なうものとナデ調整のみのものとに分かれる。外面にはススが付着している。

f．香炉（39）

土師質の香炉の破片が数個体出土しているが、陶磁器の香炉の出土例はない。形態は全て同じで、脚は4本あったと思われる。体部に×印の印刻と唐草文様風の印刻をもつものとの2通りがある。

g．筒状土器（46.47）

口縁直下に蓋の受部と思われる段を有ち、外面は半光沢をもつ程ていねいにつるつるにみがいている。用途については不明であるが、火舎の一種と考える。

h．メンコ（40.41）

大皿の底部と体部の変換部を打ち砕いて円形につくっているものが2点出土している。

(2). 瓦質土器

a．碗（43）

細片が少量出土しているが、実測可能なものは1点のみである。全体に成形・調整は雑で、内面に乱雑な直線の暗文を8本認める。

b．擂鉢（42）

片口をもつ小型のもので全体にていねいな仕上げである。1点のみ出土。

c．羽釜（44.45）

小型で全体に丸味をもち、全体にていねいな仕上げである。支脚をもつか否かは不詳。

d．鉢（48.49.50）

口縁部が垂直に立ち上がってくるものと、鉄鉢状に内側に拡張するものとがある。いずれも外面は半光沢をもつ程つるつるにみがいている。

e．茶釜（51）

口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、肩部にはりをもち、鍔部から下の体部は直線的にすぼまっていく。鍔部から上はていねいな仕上げをしているが、体部はヘラ削りのままである。明らかに知られる茶道具関係の資料としては数少ない出土品の一つである。

f．筒状土器（52.53）

口縁端部が冂形に成形された火消壺形の器形である。焼成はかたく良好。

(3). 備前焼（54～112）

備前焼は土師質土器と並んで多量に出土した遺物で、他の陶器類を寄せつけない圧倒的な量をほこっている。しかも、備前焼の研究は他の陶器類に比べて一段と進んでいるようで、特に間壁忠彦・間壁葭子両氏の編年研究の労作は、当伊丹城跡の時期決定に看過ごすことのできないものである。本稿では間壁編年に従って記述する。

a．壺類（54～65・200～202）

玉縁口縁の特徴をもつⅣ期に比定されるもの（54.55）が若干出土している他は全てⅤ期のものである。Ⅴ期の特徴としては、口縁部が短く、ほぼ垂直に立上がり、玉縁を形成しない。

又、肩部から体部にかけて荒い波状文が施されるもの(59.61)や、頸部が細長いもの(63)や、無頸壺(62)などがある。他に、いわゆる「らっきょう形徳利」が1点(200)、「雀口壺」が2点(201.202)みられる。

b．甕(71～80)

Ⅲ期の玉縁口縁をもつものが1点(71)出土しているが、他は全て、玉縁がくずれて幅が広くなるⅣ期の口縁の特徴をもつものである。玉縁部に凹線がめぐるものもあり、(79)はⅣ期末からⅤ期初頭に比定される。

c．擂鉢(81～112)

備前焼の中でも、最も多量に出土したのが擂鉢である。時期としてはⅣ期後半からⅤ期にかけてのものばかりである。

Ⅳ期後半のものは、口縁部が上方に拡張し口縁部断面が三角形状を呈す。(81.82.83)

Ⅳ期末からⅤ期初頭に比定されるものが数点認められ、これはⅣ期後半のものよりさらに口縁部が拡張し、長さが4cm位にもなり、さらに口縁部下方の垂れ下りも顕著に発達する。又、口縁部が「く字形」を呈し内面にくびれが現われる。(84～87)

出土した擂鉢の大半はⅤ期の範ちゅうに入るもので、タイプも多種である。この時期になると上方に拡張した口縁端部に面をもち、内面のくびれがさらに顕著になる。口縁部下方の垂れ下がりは退化の傾向にあり、まったくその痕跡をとどめないものもある。さらに口縁部外面に1条ないしは数条の凹線がめぐるのもⅤ期の特徴である。(88～112)

d．その他

出土量としてはそう多くはないが皿(66.67)、筒状品(68)、鉢(69.70)がある。特に(70)の鉢や(68)の筒状品などは類例が見当たらず興味ある資料といえよう。

(4)．その他の陶器 (113～123・203)

備前焼以外にもかなりの陶器片が出土しているが、大部分が生産地不詳のため今回は丹波焼、瀬戸焼に限定できる資料を抽出した。

丹波焼には、口縁部が外反する甕(123)と1本ずつのヘラ描条線を施す擂鉢(121.122)がある。

瀬戸焼には、黄緑色の釉を施した瓶子の体部片、おろし皿2点(119.120)天目碗・皿(113～118)がある。

(5)．青磁 (135～148.211.212)

a．碗(135～144)

体部外面に蓮弁を有つものと無文のものとに大きくわけられる。蓮弁をもつものには、蓮弁を別々に描いてあるもの、口縁下に一条の波線を描き、その下に縦線を入れているもの、蓮弁を縦線のみであらわしているものがある。

b．皿(145～148)

輪花皿(145)、稜花皿(146.147)、円形皿(148)の三種類が認められる。

(6). 白磁（124～128）

全て皿類で、口縁部は外反し、高台端部は面取りを行なうものとそうでないものとの二種類があり、図版にはないが碗底に福の字を押印するものが１点認められる。

(128)は、口縁端部にかすかな稜花を施した稜花皿である。

(7). 明染付（129～134.204～210）

確実な明製品の中には赤染付はなく、全て青染付で、碗底に「長命富貴」〈銭形〉(133)、「□□佳器」〈印形〉(134)の吉祥文字を画いているものがある。

中国における明代の窯址調査によれば、吉祥文字の画かれた磁器製作年代は1540年頃に比定されている。

(8). 銭貨（銭貨一覧表参照、図版10）

完成品で出土した銭は24枚あり、その大半は宋銭である。内訳は、「開元通宝」(唐銭)2枚、「祥符通宝」・「天禧通宝」・「天聖通宝」・「皇宋通宝」・「元豊通宝」・「元祐通宝」・「熙寧元宝？」の宋銭14枚、「洪武通宝」・「永楽通宝」の明銭2枚、無文銭1枚、および「寛永通宝」1枚、「文久通宝」1枚である。

(9). その他

a．石製品

石臼（茶臼）、砥石、硯の残欠が出土。

b．石造品

五輪塔の塔身２ヶ、一石五輪塔１ヶ、石仏１ヶ、宝篋印塔の笠部１ヶ出土。

c．金属品

鉄製品、青銅製品の破片が出土しているが器形、時代共に不詳。

d．瓦類

丸瓦、平瓦が出土しているが良好な資料がなく、今回は検討を加えなかった。

遺物整理にあたって橋本　久、寺川和広（奈良大学）、田中　一（竜谷大学）三氏の協力を得た。なお、備前焼については倉敷考古館の間壁忠彦、間壁葭子両氏、土師質土器については京都大学埋蔵文化財センターの宇野隆夫氏、その他姫路市教育委員会の山本博利、秋枝芳両氏の好意的な指導助言を得た。記して感謝の意を表したい。

【参考文献】○間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート」1·2·3『倉敷考古館研究集報』第１号・第２号・第５号
○宇野隆夫「京大病院遺跡出土の土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度
○京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『平安京関係遺跡発掘調査概報』1975
○足羽町教育委員会・福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡・一乗谷朝倉氏遺跡』Ⅰ～Ⅷ
○広島県教育委員会·草戸千軒町遺跡発掘調査団『草戸千軒遺跡発掘調査概報』1968年度～1976年度
○姫路市教育委員会『加茂遺跡』姫路市文化財調査報告Ⅴ1975
○陳柏泉「江西楽平明代青花窯址調査」『文物』1973年第３期

(1) 伊丹城跡第３次調査出土遺物観察表

土師質土器

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
小皿	1	○ヒズミが激しい。 ○内弯気味に立ち上る体部。	○器壁は厚い。 ○内外面共、剝離が激しく観察不可。	S18 E18　焼土層 ○径7.0cm
	2	○ヒズミが激しく口縁部は波打つ。 ○内弯気味に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部下半外面に指頭圧痕が残る。	S33 E15　焼土層 ○径7.2cm
	3	○内弯気味に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は軽い横ナデ調整。 ○体部外面には指頭圧痕と布目のかすかな痕跡が残る。 ○底内面周縁に１回、強い横ナデ（時計廻り）	S24 E3　礫層 ○径8.0cm
	4	○ヒズミが激しく口縁部は波打つ。 ○外反気味に立ち上る体部。 ○上げ底。	○体部～底部外面に横ナデ調整。 ○体部外面には指頭圧痕及び布目が残る。 ○底内面周縁に１回強い横ナデ（時計廻り）	S33 E15　焼土層 ○径8.2cm
	5	○内弯気味に立ち上る体部。 ○口縁部を一部押えつけ片口状にする。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面には部分的に指頭圧痕が残る。	S24 E15　焼土層 ○径7.6cm ○内に一部煤が付着。
	6	○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○口縁部はわずかに外反する。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面は弱いナデ調整を行ない部分的に指頭圧痕が残る。 ○底内面周縁に１回強い横ナデ(時計廻り)	S24 E9 茶褐色土 ○径7.8cm
	7	○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部下半外面に指頭圧痕が残る。	S9 E9 暗茶褐色粘質土層 ○8.2cm

器　　形	土器番号	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
小　　皿			○底内面周縁に1回強い横ナデ(時計廻り) ○外面に部分的に布目圧痕が残る。	
	8	○ほぼ直線的にのびる体部。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○底内面周縁に1回強い横ナデ(時計廻り)	S30 E15　焼土層 ○径8.0cm
	9	○ヒズミが激しく口縁が波打つ。 ○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面はナデ調整。 ○外面は軽いナデ調整を行なうが、ユビオサエの痕跡が明僚に残る。	S24 E3 礫層 ○径8.4cm
	10	○ヒズミが激しく口縁部が波打つ。 ○内弯気味に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面はナデ調整（上→下) ○側面には縦位に粘土接合痕が残る。 ○体部外面は無調整。	S18 E18　焼土面 ○径7.6cm
	11	○ヒズミが激しい。 ○内弯して立ち上る体部。 ○底部はわずかに凹む。	○内面はナデ調整。 ○側面に縦位に粘土紐接合痕が残る。 ○接合部には内外面共指頭圧痕が残る。 ○外面の調整不詳。	S15 E15　茶褐色砂礫層 ○径7.6cm
	12	○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○口縁部付近でわずかに外反する。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕あり。	S24 E15　焼土層 ○径8.0cm
	13	○ヒズミが激しく口縁部が波打つ。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は軽く横ナデ調整を行なう。 ○体部下半に薄く布目の痕跡が残る。	S9 E3　茶褐色土層 ○径7.6cm
	14	○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面には部分的に指頭圧痕及び布目の痕跡が残る。 ○底内面周縁に1回強	S27　E12　焼土層 ○径7.4cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
小皿			い横ナデ(時計廻り)	
	15	○ヒズミが激しく口縁部は波打つ。 ○体部はほぼ直線的に立ち上る。 ○底部はわずかに凹む。	○内面～口縁部外面に横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕が残る。	S18 E9　茶褐色土層 ○径7.6cm
	16	○ヒズミが激しい。 ○内弯気味に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面はナデ調整。 ○外面には指頭圧痕が残る。	S18 E18　焼土面 ○径7.6cm
	17	○ヒズミが激しい。 ○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○底部中央がわずかに凹む。	○内面はナデ調整。 ○外面には指頭圧痕が残る。	S18 E18　焼土面 ○径7.6cm
	18	○内弯気味に立ち上る体部。 ○底部はわずかに凹む。	○内面はナデ調整。 ○体部外面には指頭圧痕が残る。	S18 E18　焼土面 ○径7.4cm
	19	○ヒズミが激しい。 ○内弯気味に立ち上る体部。 ○上げ底。	○内面はナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕が残る。 ○底部外面に部分的に布目の痕跡が残る。	S18 E18　焼土面 ○径7.8cm
中皿	20	○外反気味に立ち上る体部。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面は指オサエの後軽くナデ調整。	S24 E3　礫層 ○径9.2cm
	21	○外反気味に立ち上る体部。	○体部外面に指頭圧痕が残る。	S18 E12　暗褐色土 ○径10.0cm
	22	○直線的に立ち上る体部。 ○平底風の底部。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面にわずかに指頭圧痕が残る。 ○底内面周縁に圏線を生じる。	S27 E3　黄褐色の粘土 ○径10.8cm
	23	○口縁部内面はわずかに凹みを持つ。 ○ほぼ直線的に立ち上る体部。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面にわずかに指頭圧痕が残る。	S30 E12　焼土層 ○径9.8cm
	24	○直線的に立ち上る体部。	○体部上位の内外面に	S18 E12　暗褐色土

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
中皿			対応して指頭圧痕が残る。	○径10.1cm
	25	○内弯気味に立ち上る体部。 ○底部との境界は不明瞭。	○内面～体部外面は横ナデ調整を行なう。 ○体部上半外面に指頭圧痕が残る。	S18 E9　茶褐色土層 ○径10.0cm
	26	○体部は内弯気味に立ち上り口縁部付近でわずかに角度を変え内弯する。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部下半に指頭圧痕が残る。 ○底内面周縁に1回強い横ナデ(時計廻り)	S18 E9　茶褐色土層 ○径10.8cm
	27	○体部は外反気味に立ち上り口縁部付近でわずかに内弯する。 ○上げ底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部下半外面に指頭圧痕が残る。 ○底内面周縁に1回強い横ナデ(時計廻り)	S18 E9　茶褐色土層 ○径10.8cm
	28	○内弯気味に立ち上る体部。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○底部内面中央付近に凹み有り。	S24 E15　焼土 ○径9.6cm ○口縁部内外面に煤付着。
大皿	29	○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○平底。 ○体部と底部の境界は比較的明瞭。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○底内面周縁に圏線を生じる。	S27 E15　攪乱土 ○径12.2cm
	30	○口縁部付近でわずかに角度を変え外反する。 ○直線的に立ち上る体部。 ○平底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面ナデ調整。 ○全体に仕上げはていねい。 ○底部内面周縁に圏線を生じる。	S30 E15　焼土層 ○径14.0cm
	31	○口縁部付近でわずかに角度を変え外反する。 ○体部はほぼ直線的に立ち上る。 ○平底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○底内面周縁に圏線を生じる。 ○体部と底部の境界は比較的明瞭。	S33 E9　焼土層 ○径14.2cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
大皿	32	○口縁部付近でわずかに角度を変えて外反する。 ○ほぼ直線的に立ち上る体部。 ○平底。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面は軽く指頭圧痕が残る。 ○底内面周縁に圏線を生じる。	S24 E3　礫層 ○径14.4cm
	33	○口縁部はわずかに角度を変え直立気味に立ち上る。 ○体部は中央付近で角度を変え外反する。 ○平底。 ○体部と底部の境界は明瞭。	○内面～口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕が残る。	S15 E12　茶褐色 ○径11.8cm
杯	34	○内弯して立ち上る体部。	○口縁部内外面強い横ナデ調整。 ○体部内面に縦位の細い篦描の線刻あり。 ○体部内面にはかすかに指頭圧痕が残る。	S30 E12　灰層 ○復元口径8.4cm
椀	35	○内弯気味に立ち上る体部。	○底部外面横ナデ調整。 ○他は不明。 ○貼り付け高台。	S21 E15　南北たちわり　焼土層
鉢	36	○口縁はわずかに外方へ張り出す、端部は面をなす。 ○体部は内弯気味に立ち上る。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○体部内面は上半に篦磨下半に刷毛目を施す。 ○体部外面篦磨き。一部に篦削りの痕跡が残る。	S33 W9　灰層 ○復元口径28.8cm
羽釜	37	○口縁部は内傾気味に立ち上る。端部は内傾する面をなす。 ○体部は内弯気味におりる。 ○鍔はやや上方にのびる。端部は角張っている。	○口縁部内面横ナデ調整。 ○外面は横ナデによると思われる凹凸が認められるが剥離が激しく不詳。 ○体部外面は粗い削り。 ○内面は不詳。 ○鍔は貼り付け。	S27 E12　灰層 ○復元口径27.5cm ○体部外面に煤付着。
	38	○口縁部はほぼ直立する。端部は面をなす。 ○体部は内弯気味におりる。	○体部上半内面～口縁部外面横ナデ調整。 ○体部内面上半は横方	S24 E3　東西トレ ○復元口径25.8cm ○復元高19.45cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
羽釜		○鍔は短く上方へのびる。 ○丸底。	向、下半は斜方向に粗い刷毛目を施す。 ○体部外面は横方向（時計廻り）に粗い篦削り。 ○底部外面は不定方向に篦削り。	○外面に煤が付着。
香炉	39	○外反する口縁部。上端は丸味を帯びる。 ○ほぼ垂直に立ち上る体部。 ○平底。	○内面～口縁部外面横ナデ調整。 ○体部外面ていねいな篦磨き。 ○体部外面中位に×形の印刻を廻らす。 ○底部外縁を篦で面取りした後4ヶ所に脚を貼り付ける。	S27 E9　焼土層 ○復元口径11cm ○復元高4.7cm ○同一タイプで唐草文様の印刻を廻らすもの有り。
筒状土器	46	○わずかに内傾して立ち上る口縁部。 ○口縁下外縁に面をもつ（蓋の受部か） ○体部はほぼ直立する。	○口縁部内外面横ナデ調整。 ○体部内外面篦磨き。外面はていねいで光択を持つ。 ○体部内面に粘土帯を接合し口縁部を作る。 ○口縁部と体部の境界外面に篦による1条の細い溝が廻る。	S27 E12　灰層 ○径22.2cm
	47	○内傾して立ち上る口縁部。 ○口縁上端は面をなす。 ○口縁下、外縁に面をもつ。 ○ほぼ直立する体部。	○内面～口縁部外面横ナデ調整。 ○体部外面はていねいに篦磨を行ない光択を持つ。 ○口縁部と体部の境界外面に篦による1条の細い溝が廻る。	S30 E12　灰色 ○復元口径24.6cm
メンコ	40	○ほぼ円形。 ○断面はわずかにヒズミあり。	○一面は横ナデ調整。他の面はナデ調整。	S27 E9　焼土層 ○径3.0～3.1cm ○土師皿の体部～底部の一部を転用。
	41	○わずかに角を持つ。 ○断面はほぼ水平。	○一面は横ナデ調整。他の面には指頭圧痕が残る。	S30 E9　焼土層 ○径3.0cm ○土師皿の体部～底部の一部を転用。

瓦質土器

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
碗	43	○内弯気味に立ち上る体部。	○口縁部内外面は強い横ナデ調整。 ○体部内面はナデ調整を行なった後、乱雑な暗文を施す。 ○体部外面は横ナデ調整を行なうが、かすかな指頭圧痕が残る。	S24 E3　東西トレ ○復元口径14cm
擂鉢	42	○直立する口縁部。端部は内傾する面をなす。 ○体部は外弯気味に立ち上る。 ○平底。	○内外面共横ナデ調整。 ○条線は4条単位で施す。 ○体部と底部の境界は明瞭。	S24 E18　焼土層 ○復元口径8cm ○復元高3.85cm
羽釜	45	○わずかにつまみ上げた様な口縁部。端部は丸く収める。 ○内弯気味に立ち上る肩部。 ○鍔はやや下向きにのびる。断面は丸みを帯びた三角形。	○内外面共横ナデ調整。	S24 E15　焼土層 ○ミニュチュア製品。 ○復元口径8.0cm
	44	○短く直立する口縁部。端部は丸く収める。 ○内弯して立ち上る肩部。 ○鍔はほぼ水平方向に短くのびる。断面は丸味を帯びた三角形。	○口縁内外面横ナデ調整。 ○他は不詳。 ○鍔のつくりは厚い。	S24 E15　焼土 ○ミニュチュア製品。 ○復元口径6.5cm
鉢	48	○体部がほぼ直立する直口の鉢。 ○口縁端部は水平な面をなす。	○内面は横ナデ調整。 ○口縁端部の内外は篦による面取りを横ナデの後に行なう。 ○外面は篦磨を行ない光択を持つ。 ○体部下半の外面に篦削りの痕跡あり。	S33 E12　焼土層 ○復元口径26.6cm
	49	○口縁端部は内側に拡張し、上端は広い面をなす。 ○体部は内弯して立ち上る。	○内面は横ナデ調整。 ○外面は篦磨を行ない光択を持つ。	S18 W6　暗黄褐色埋土 ○復元口径31.7cm
	50	○口縁端部は内側に拡張し、上端は広い面をなす。	○内面は横ナデ調整。 ○外面は篦磨を行ない	S30 E12　焼土層 ○復元口径32.4cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢		○体部は内弯気味に斜に開く。	光択を持つ。	
茶釜	51	○内傾気味に立ち上る口縁部。端部はわずかに外方へ拡張し水平な面をなす。 ○最大径は肩部にある。 ○体部は直線的に開く。 ○鍔はほぼ水平にのびる。	○口縁部内面～肩部外面横ナデ調整。 ○体部外面篦削り（時計廻り） ○肩部～体部の内面は横方向の刷毛目（時計廻り）の後、横ナデ調整。 ○鍔は貼り付け。 ○肩部には耳を貼り付けている。	S18 E12　南北溝 ○復元口径14.4cm
筒状土器	53	○内弯気味に直立する。口縁部と体部は区別出来ない。 ○口縁端部は水平な面をなす。	○内面横ナデ調整。 ○口縁端部両側面取り。 ○口縁内面に篦削りの痕跡が認められる。 ○外面はていねいに篦磨を行ない光択を持つ。	S30 E6　暗褐色SD S33 E9　焼土層 ○復元口径16.4cm
	52	○口縁部～体部は直立し、区別出来ない。 ○口縁端部は水平な面をなす。	○内外面共横ナデ調整。を行なう。 ○口縁端部内側は面取りを行なう。	S18 E3　茶褐色粘質土層（礫混） ○復元口径20.7cm

備前焼

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	54	○玉縁の口縁。	○内外面共横ナデ調整。	S9 W9　焼土層 ○Ⅳa期 ○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰褐色。 ○復元口径14.0cm
	55	○わずかに内傾して立ち上る玉縁の口縁部。端部は丸く収める。	○内外面共に横ナデ調整。	○Ⅳ期 ○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰色。 ○復元口径10.6cm
	56	○玉縁状の口縁。	○内外面共横ナデ調整。	S30 E12　灰層 ○Ⅴ期

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺				○胎土：小石を少量含むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：14.2cm
	57	○ほぼ直立する口縁部。端部はわずかに外方へ張り出す。	○内外面共横ナデ調整を行なう。 ○口縁下端に篦状工具による細い凹線様の直線が1条廻る。	S24 E12　灰層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰色。 ○復元口径：9.0cm
	58	○口縁部はほぼ直立した後端部をわずかに外方へ折り曲げる。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁外面に1条の凹線が廻る。 ○口縁下端に篦状工具による凹線様の直線が廻る。	S30 E12　灰層 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：灰褐色。 ○復元口径：12.0cm
	59	○外反する口縁部。端部は外傾する面をなす。	○内外面共横ナデ調整。 ○体部上半には粗い櫛描波状文が廻る。	S33 E12　焼土層 ○Ⅴ期 ○胎土：1cm大の小石を含むがきめ細く良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：灰色。 ○復元口径：9.0cm
	60	○わずかに外反する口縁部。端部は丸く収める。	○内外面共横ナデ調整。	Z－Z ○Ⅴ期 ○胎土：7～8mm大の砂粒を少量含む。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：暗灰褐色。 ○復元口径：9.0cm
	61	○わずかに外反する口縁部。端部はわずかに外傾する面をなす。	○内外面共横ナデ調整を行なう。 ○体部上半には粗い櫛描波状文が廻る。 ○体部中央付近に櫛目の痕跡が残る。	S27 E15・S33 E9 焼土層 ○Ⅴ期 ○胎土：細いカイメン状を呈す。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：茶褐色。
無頸壺	62	○体部からわずかに突出す	○内外面共横ナデ調整。	S9 W9　たちわり

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
無頸壺		る口縁部。 ○体部最大径は上位にある。	○体部外面には篦削りの痕跡が認められる。 ○肩部から体部にかけて数条の凹線がめぐる。	焼土層(炭) S27 E9　灰層 ○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：14.4cm
壺	63	○外反した後、外方へ曲折する口縁部。	○内外面共横ナデ調整。	S24 E15　焼土層 ○胎土：細いカイメン状を呈す。 ○焼成：良。 ○色調：灰緑褐色。 ○復元口径：6.2cm
	64	○体部から短く直立する口縁部。	○内外面共横ナデ調整。	S30 E15　灰層 ○Ⅴ期 ○胎土：良。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰褐色。
	65	○短く直立した後わずかに外方へ折れ曲る。	○内外面共横ナデ調整。 ○体部上半に円形の粘土を貼り付ける。	S9 W9　たちわり焼土層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰褐色。 ○復元口径：21.9cm
甕	71	○玉縁の口縁。	○内外面共横ナデ調整。	S9 E9　茶褐色粘質土層(礫混) ○Ⅲb期 ○胎土：きめこまかく良好。 ○焼成：良好。 ○色調：暗灰褐色。
	72	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。	○内外面共横ナデ調整。	S9 W9　焼土層 ○Ⅳb期～Ⅴ期初頭 ○胎土：粗い砂粒を含むが良好。 ○焼成：良好。 ○色調：暗灰褐色。
	73	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁上端に1条、外面に3条の弱い凹線	S12 W9　攪乱土 ○Ⅳ期 ○胎土：粗い砂粒を含

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕			が廻る。	むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：茶褐色。
	74	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。丸味を帯びる。	○内外面共横ナデ調整。	S24 E15　焼土 ○Ⅳb期 ○胎土：砂の粒子そろい良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。
	75	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。わずかに丸みを帯びる。	○内外面共横ナデ調整。	S9 W9　たちわり ○Ⅳ期 ○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：赤褐色。
	76	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。わずかに丸味を帯びる。	○内外面共横ナデ調整。 ○体部内面には刷毛目の痕跡らしきものが残る。 ○体部外面に箆描きの線刻が認められる。	表採 ○Ⅳb期 ○胎土：粗い砂粒を多く含む。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰茶褐色。 ○復元口径：23.0cm
	77	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。 ○口縁部は内傾気味に立ち上る。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○体部外面は不整方向のナデ調整、内面は粗い刷毛目。	S33 E9　焼土層 ○Ⅳb期 ○口縁の一部に煤付着。 ○胎土：粗い砂粒、1cm大の小石を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：31cm
	78	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。 ○口縁は外反して立ち上る。	○内外面共横ナデ調整。	S30 E6　黄褐色土の上の粘土層 ○Ⅳ期 ○胎土：粒子の整った砂を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：茶褐色。 ○復元口径：52.6cm
	79	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁外面に不明僚な凹線が2条廻る。	S37 W12　土拡内焼土層 ○Ⅳb期～Ⅴ期

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕				○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：65.0cm
	80	○外面に大きくたれ下る玉縁の口縁。 ○口縁は外反して立ち上り外面に稜を持つ。	○内外面共横ナデ調整。	S18 W12　攪乱土 ○Ⅳ期 ○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：暗茶褐色。 ○復元口径：68.0cm
擂鉢	81	○口縁部を上方へ拡張し、端部は丸く収める。	○口縁内外面に横ナデ調整。 ○内面に8条単位の条線を粗く施す。 ○使用痕が著しい。	S24 E12　黒色砂礫土層 ○Ⅳb期 ○胎土：砂多く、きめ粗い。 ○焼成：良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：28.4cm
	82	○口縁端部を上方へ拡張。 ○口縁端部を丸く収める。	○口縁部内外面に横ナデ調整。 ○内面の条線は9条以上。 ○使用痕著しい。	S24 E9　黄茶 ○Ⅳb期 ○胎土：砂多く、きめ粗い。 ○焼成：良好。 ○色調：灰色。
	83	○口縁端部を上方へ拡張。 ○口縁端部を丸く収める。	○口縁部内外面に横ナデ調整。	S15 W6　茶褐色砂質土層(礫混) ○Ⅳb期 ○胎土：砂多く、きめ粗い。 ○焼成：良。 ○色調：黄白色。
	84	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁端部は丸く収める。 ○口縁下端はたれ下る。	○内外面とも横ナデ調整。 ○体部上端内面に1条凹線が廻る。 ○内面条線は9条以上の単位で施されている。	S9 W18　攪乱土 ○Ⅳb期末～Ⅴ期初頭。 ○胎土：きめ細く良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○復元口径：28.4cm
	85	○口縁部がほぼ垂直に立ち上る。	○内外面とも全面に横ナデ調整。	S9 W9　砂質土層 ○Ⅳb期末～Ⅴ期初頭

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
擂鉢		○口縁端部を丸く収める。 ○口縁下端はやや外反してたれ下る。	○内面の条線数不明。 ○使用痕著しい。	○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：32.8cm
	86	○口縁部がほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁下端は外反し、たれ下る。	○内外面とも全面に横ナデ調整。 ○内面の条線は5条単位で施す。 ○口縁外面にヘラ状工具の背を用い凹線様の線を1条施す。 ○使用痕著しい。	S9 W6　茶褐色土層。 ○Ⅳb期末～Ⅴ期初頭 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：33.6cm
	87	○口縁部はわずかに内傾して立ち上る。 ○口縁上端は内傾している。 ○口縁下端はたれ下りが顕著。	○内外面共横ナデ調整。	S30 E6　黄褐色土の上の粘土 ○Ⅵb期～Ⅴ期 ○胎土：粗い砂を含むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：25.1cm
	88	○口縁部はほぼ直立して立ち上る。 ○口縁部上端は内傾している。 ○口縁部下端には退化したたれ下りが認められる。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁外面には浅い凹線が1条廻る。 ○口縁部と体部の境界付近内面に条線を施した後2条の凹線を施す。 ○内面には条線が認められるが条数は不明。	S15 E15　茶褐色砂礫層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：30cm
	89	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁端部は内傾気味で、面取り風に収める。 ○口縁下端はわずかにたれ下る。	○内外面とも全面に横ナデ調整。 ○口縁外面に2条の強い凹線が廻る。 ○内面条線は縦方向に施した後、斜方向に施す。	S33 E12　焼土層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：紫褐色。 ○復元口径：31cm
	90	○口縁はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁上端は内側を丸く収	○内外面とも全面に横ナデ調整。 ○口縁外面に2条の凹	S30 E12　灰層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
擂鉢		める。 ○口縁下端に退化した、たれ下りが認められる。	線が廻る。 ○口縁部と体部の境界付近内面にハケ状工具の痕跡が残る。 ○内面に15条単位の条線が施されている。	好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰色。 ○復元口径：30cm
	91	○口縁部はわずかに内傾して立ち上る。 ○口縁下端は退化した、たれ下りが認められる。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面には条線が認められるが条数は不明。 ○重ね焼の痕跡あり。 ○口縁外面に凹線2条廻る。 ○口縁上端は内傾し1条の凹線が廻る。	S24 E9　焼土層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：26.2cm
	92	○口縁は外反気味に立ち上る。 ○口縁上端は内傾気味で浅く凹む。 ○口縁下端はごくわずかにたれ下る。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁外面に浅い凹線が1条廻る。	○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。
	93	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁上端は内傾する。 ○口縁下端は退下した垂れ下りが認められる。	○内外面共全面に横ナデ調整。 ○口縁外面に1条の凹線が廻る。	S30 E12　灰層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰色。
	94	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁上端は内傾している。 ○口縁下端には退化した、たれ下りが認められる。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面には条線が認められるが条数不明。 ○口縁外面に5条の凹線が廻る。	S33 E15～S36 E15 茶褐色粘質土層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：良好。 ○色調：暗灰色。
	95	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁上端は内傾している。 ○口縁下端は退化した、たれ下りが認められる。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面には条線が認められるが条数は不明。 ○口縁外面に浅く弱い凹線が4条廻る。	S27 E12　灰層 ○Ⅴ期初頭 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰褐色。
	96	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面には条線が認め	S27 E12　灰層 ○Ⅴ期

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
擂鉢		○口縁上端は内傾している。 ○口縁下端は退化した、たれ下りが認められる。	られるが条数不明。 ○口縁外面に4条の凹線が廻る。	○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰色。
	97	○口縁部は外反して立ち上る。 ○口縁部上端はわずかに内傾している。 ○口縁下端には退化した垂れ下りが認められる。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁部外面には2条の凹線が廻る。	S27 E12　灰層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：灰色。
	98	○口縁部はほぼ直立して立ち上る。 ○口縁上端はほぼ水平に仕上げられている。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁外面には3条、上端には1条の凹線が廻る。	S9 W9　たちわり ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗灰褐色。
	99	○口縁はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁上端はわずかに内傾し、浅く凹む。 ○口縁下端はごくわずかたれ下る。	○内外面共横ナデ調整を行なう。	S9 W9　焼土の上の赤土 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。
	100	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁上端はわずかに内傾し、浅く凹む。 ○口縁下端は退化した、たれ下りが認められる。	○内外面共全面に横ナデ調整。 ○使用痕が著しい。	S30 E9　焼け土及黄褐色の粘土層 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：良好。 ○色調：淡赤褐色。
	101	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁下端は丸みを帯び、体部へ接続している。	○内外面とも全面に横ナデ調整。 ○口縁上端は内傾し、わずかに凹みを持つ。 ○内面条線は4本以上の単位で施す。 ○使用痕著しい。	S15 E12　茶褐色砂礫 ○Ⅴ期 ○胎土：粒子の粗い砂を少し含むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：23.8cm
	102	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。端部は内傾気味で	○内外面とも横ナデ調整。	S30 E9　焼土層 ○Ⅴ期

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
擂鉢		面取り風に収める。	○口縁部外面に2条の強い凹線が廻る。 ○使用痕が著しい。	○胎土：砂粒子細かくそろい、きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：19cm
	103	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁端部は内傾気味で面取り風に収める。	○内外面とも横ナデ調整。 ○口縁部外面には3条の弱い凹線が廻る。 ○使用痕が著しい。	S9 W9　赤色土 ○Ⅴ期初頭 ○胎土：砂粒子細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：黄赤色。 ○復元口径：22.2cm
	104	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁上端を丸く収める。 ○内外面とも凹凸が激しい。	○内外面とも全面に横ナデ調整。 ○口縁外面に凹線が2～3条廻る。 ○口縁内面には細く浅い凹線が1条廻る。 ○内面の条数不明。 ○使用痕著しい。 ○重ね焼の痕跡有。	S15 E12　茶褐色砂礫 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：17.8cm
	105	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。端部はほぼ水平で内側丸く収める。	○内外面とも横ナデ調整。 ○口縁部外面に2条の凹線が廻る。 ○口縁部と体部の境界付近にヘラ状工具を押し付け回転した跡がある。 ○使用痕が著しい。	S9 W9　焼土層 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：灰色。 ○復元口径：20.8cm
	106	○口縁部はやや内弯する。 ○口縁上端は内傾している。 ○口縁下端は丸味を滞びて体部へ接続している。	○内外面とも全面に横ナデ調整。	S12 E12　杭周辺土拡内 ○Ⅴ期 ○胎土：粒子の大きい砂を少し含むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：22cm
	107	○口縁部はほぼ垂直に立ち上り、端部は内傾気味で	○内外面とも横ナデ調整。	S24 E5　焼土層 S 9 E9　暗茶褐色

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
擂鉢		面取り風に収める。 ○片口の注口を持つ。	○口縁外面に5条の凹線が廻る。 ○体部外面には粘土紐接合痕が残る。 ○条線は10条単位で9単位施す。 ○使用痕著しい。	粘質土層 ○Ⅴ期 ○胎土：砂多いが良好。 ○焼成：良好。 ○色調：赤褐色。 ○口径：31.7cm ○高：12.35cm
	108	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○片口の注口を持つ。	○内外面とも全面横ナデ調整。 ○内面条線は11条単位で縦方向に施した後8本単位で斜方向に施し、底面にはS字状に施す。 ○口縁外面に1条の凹線が廻る。 ○口縁上端は内傾し、細い凹線が1条廻る。	S18 E12　南北溝 ○Ⅴ期 ○胎土：粗い砂を含むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗灰褐色。 ○復元口径：32.5cm 高：15.2cm
	109	○口縁部がほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁外端は外方へ張り出している。 ○口縁上端は内側を丸く収める。	○内外面とも全面横ナデ調整。 ○内面の条線は11条単位で施されている。 ○内面に自然釉の異物が付着し、使用痕は認められない。	S9 W6　茶褐色土層 ○Ⅴ期初頭 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：25.2cm ○高：10.8cm
	110	○口縁部は垂直に立ち上る。 ○口縁端部は内傾気味で面取り風に収める。 ○内外面とも凹凸が激しい。	○口縁部内外面は強い横ナデ調整。 ○口縁外面には2条の凹線が廻る。 ○条線は12条単位。	S24 E15　表土 ○Ⅴ期 ○胎土：砂粒子細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗灰色。 ○復元口径：26.1cm
	111	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。端部は内傾気味で面取り風に収める。 ○口縁下端には退化した、たれ下りが認められる。 ○内外面とも凹凸が激しい。	○内外面とも横ナデ調整。 ○口縁部外面に5条の凹線が廻る。	S18 E9　茶褐色土層 ○Ⅴ期 ○胎土：砂粒子細かくそろいきめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：31.8cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
擂鉢	112	○口縁部は内傾して立つ。 ○口縁上端は内傾している。	○内外面共に横ナデ調整。 ○内面には7条単位の条線が施されている。 ○口縁外面に3条の凹線が廻る。 ○口縁部と体部の境界付近内面に1条の凹線が廻る。	S24 E18　焼土層 S9 E9　暗茶褐色粘質土層 ○V期 ○胎土：粗い砂を含むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：30.4cm
皿	66	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁上端は内傾し、浅く凹む。	○内外面共横ナデ調整。 ○底部外面はヘラ削り。 ○体部中央に半円孤状のスタンプ有り。	S9 E9　暗茶褐色粘質土層 ○V期 ○胎土：きめ細かく良好。(1cm大の小石1ヶ含) ○焼成：かたく良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：21.8cm ○高：3.8cm
	67	○内弯して立ち上る体部。	○内外面共横ナデ調整。 ○体部外面下半にヘラ削りの痕跡が残る。 ○重ね焼きの痕跡有。	S30 E6　暗褐色砂 ○V期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：茶褐色。 ○復元口径：22.8cm ○高：3.5cm
筒状品	68		○内外面共横ナデ調整。	S24 E12　灰層 ○V期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗灰褐色。
鉢	69	○体部が内弯して立ち上る浅手の鉢。	○内外面共横ナデ調整。	S21 E15　焼土層(灰層の下) ○胎土：きめ細かく良好。(雲母砂含) ○焼成：かたく良好。 ○色調：暗灰色。 ○復元口径：21.2cm
	70	○体部が内弯して立ち上る深手の鉢。	○内外面共横ナデ調整。 ○口縁直下に粘土紐を	S24 E12　灰色 ○胎土：きめ細かく良

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢		○口縁端部は鋭く調整している。(ヘラで面取りか)	貼り付けた後、棒状の工具を押しつけネジリ状の文様を施す。	好。 ○焼成：良好。 ○色調：漆黒色。 ○復元口径：19.1cm

丹波焼

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	123	○短く外反する口縁部。 ○口縁端部はわずかに面をなす。 ○丸みを帯び立ち上る体部。	○口縁部内外面共つよい横ナデ。 ○体部外面、刷毛目の後横ナデ。 ○体部内面、粘土紐接合痕の上に指頭圧痕が残る。粗い横ナデ、下半程雑。	表採 ○胎土：細かく粒子の揃った砂粒を含む良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：褐色。 ○復元口径：18.3cm
擂鉢	121	○口縁部はわずかに面をなし端部は丸く収める。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面篦描の条線。	S30 E12　焼土層 ○胎土：細い砂粒を含むが良好。 ○焼成：かたく良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：33.2cm
	122	○口縁部はわずかに面をなし端部は外傾する面を持つ。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面篦描きの条線。	S30 E12　灰層 ○胎土：細い粒子の砂粒を含むがきめ細かく良好。 ○焼成：非常にかたく良好。 ○色調：茶褐色。

瀬戸焼

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
天目皿	113	○直線的に外反する体部。	○口縁部付近は茶褐色の釉。体部は黒褐色。	S30 E15　褐色土 ○復元口径：11.4cm
天目碗	114	○体部は内弯して立ち上る直口の碗。 ○高台は面取りを行なう。	○削り出し高台。 ○体部下半は横ナデ調整。 ○全面に黒褐色の釉を施した後、口縁付近に黄茶褐色の釉。	S15 E15　砂礫層 ○小型品 ○口径：5.1cm ○高：2.6cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
天目碗	115	○体部は内弯して立ち上り口縁付近でわずかに角度を変えて外反する。	○口縁部内外面は茶褐色、体部は黒褐色の釉。	S30 E18　南北トレ ○復元口径：8.1cm
	116	○体部は内弯して立ち上り口縁付近で角度を変えて外反する。	○内外面共黒色の釉。 ○体部内外面に光択の強い縦稿状の帯を認める。	S27 E15　焼土層 ○復元口径：10.8cm ○黒色
	117	○体部は内弯気味に立ち上り、口縁部は角度を変えて外反する。	○内外面共茶褐色の釉。	S12 E3　黄色土層 ○復元口径：11.9cm
	118	○体部は内弯して立ち上り口縁部付近でわずかに角度を変えて外反する。	○内外面共黒褐色の釉。	S24 E15　灰層 ○復元口径：11.7cm
おろし皿	119	○体部はわずかに内弯する。 ○口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面の底部付近に条線が篦描きで格子状に粗く施されている。 ○口縁部に黄緑色の釉。	S27 E15　灰層 ○白桃色。 ○二次焼成を受けた為か釉が変色している。
	120	○外弯気味に開く体部。	○内外面共横ナデ調整。 ○内面下半に篦描きの刻み目(上→下)を施す。 ○口縁部に淡緑色の釉。	S27 E12　灰層 ○復元口径：12cm ○白桃色。

青　磁

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
碗	135	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁端部は釉により丸味を帯びる。	○釉は厚い。	S9 E9　暗茶褐色粘質土層 S27 E9　南北溝 ○黄灰色。 ○貫乳あり。 ○復元口径：12.8cm
	136	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁端部は丸く収める。	○釉は厚く均一。 ○鎬は剣先形の蓮弁。 ○高台端部に面取りを行なう。 ○貼り付け高台。	S27 E12　灰層 ○黄灰色。 ○貫乳あり。 ○復元口径：13.5cm ○高：7.2cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
碗	137	○口縁端部は丸く収める。	○釉は厚い。 ○鎬の蓮弁は別々に描いている。	出土地点不明 ○復元口径：12.0cm ○淡緑色
	138	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁端部は丸く収める。	○釉は厚く均一。 ○鎬は口縁下に1条の波線を入れ、その下に縦の線刻を入れたもの。 ○内面下半にも施文。	S24 E17　焼土層 ○淡緑黄色。 ○貫乳なし。 ○復元口径：13.0cm
	139	○口縁端部は丸く収める。	○釉は厚い。 ○鎬は　形を連続して描いている。	S33 E12　焼土層 ○淡緑黄色。 ○貫乳あり。 ○復元口径：11.2cm
	140	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁端部は釉により丸味を帯びる。	○釉は厚く比較的均一。 ○鎬は口縁下に1条の波線を入れ、その下に縦の線刻を入れる。	S30 E12　灰層 S27 E18　茶褐色土層 ○淡緑色 ○貫乳なし。 ○復元口径：14.5cm
	141	○口縁端部は丸く収める。	○釉は比較的厚く均一。 ○鎬は口縁下に1条の波線を入れ、その下に縦線を入れる。	S27 E8 ○淡緑色。 ○貫乳なし。 ○復元口径：13.1cm
	142	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁上端はわずかに面をなす。	○釉は厚い。口縁内面で少し厚味を増す。 ○鎬は口縁下に1条の波線を入れ、その下に縦線を入れる。	S27 E9　焼土層 ○黄緑色。 ○貫乳あり。 ○2次焼成を受ける？ ○復元口径：12.8cm
	143	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁上端は内傾する面をなす。	○釉は比較的薄く均一。 ○体部外面には横方向の2条の線と縦方向の線刻が廻る。間隔不整い。	S27 E3　礫層 ○青緑色。 ○貫乳あり。 ○復元口径：13.2cm
	144	○ほぼ垂直に立ち上る体部。 ○口縁端部は丸く収める。	○釉は厚く均一。 ○外面は全面、内面は斜に施釉し下半は無釉。	S30 E12　灰層 ○淡緑色。 ○貫乳なし。 ○復元口径：7.4cm
輪花皿	145	○5枚の大きな蓮弁を持つ。 ○内弯して立ち上る体部。	○釉は比較的薄く口端にやや厚くかかる。	S27 E15　焼土層 ○淡青緑色。

器　　形	土器番号	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
			○高台端部は面取りを行なう。 ○貼り付け高台。	○貫乳なし。 ○復元口径：11.2cm ○復元高：3.5cm
稜　花　皿	146	○腰に鈍い稜を持ち外反して立ち上る体部。 ○口縁端部は釉により丸味を帯びる。	○釉は厚い。 ○口縁～体部上半の内面に文様あり。 ○稜花の単位は不整い。	S30 E15　灰層 ○淡緑色。 ○貫乳あり。 ○復元口径：12.8cm
	147	○外反して立ち上る体部。	○釉は比較的厚い。 ○口縁の内側に3本の波状線が入る。 ○稜花の単位不整い。	S30 E15　褐色土 ○淡緑色。 ○貫乳あり。 ○復元口径：13.9cm
円　形　皿	148	○腰に鈍い稜を持ち外反気味に立ち上る体部。	○器壁は厚い。 ○釉は不均一。	S27 E12　灰層 ○黄緑色。 ○貫乳あり。 ○口径：11.5cm

白　　磁

器　　形	土器番号	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
皿	124	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁部付近でわずかに外反する。	○釉は比較的薄く均一。 ○貼り付け高台。 ○高台端部面取り。	S24 E15　焼土層 ○復元口径：11.2cm ○高：3.3cm
	125	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁部は外反する。	○釉は比較的薄く均一。 ○貼り付け高台。 ○高台端部面取り。	S15 E15　砂礫層 ○復元口径：12cm ○高：3.2cm
	126	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁部は外反する。	○釉は比較的薄く均一。 ○貼り付け高台。 ○高台端部面取り。	S12 E12　杭周辺土拡内 ○復元口径：11.9cm ○高：3.1cm
	127	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁部は強く外反する。	○釉は薄く均一。 ○貼り付け高台。	S24 E18　焼土 ○復元口径：11.6cm ○高：2.55cm
稜　花　皿	128	○内弯して立ち上る体部。 ○口縁部は外反する。	○釉は比較的薄く均一。 ○口縁端部を軽く押え稜花様にしているが単位は不整い。 ○貼り付け高台。 ○高台端部面取り。	S18 E12　土拡内黒色攪乱土 ○復元口径：13.6cm ○高：3.3cm

明　染　付

器　　形	土器番号	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
皿	129	○内弯気味に立ち上る体部。 ○口縁部は外反する。	○釉は比較的厚くやや不整い。 ○碗底横ナデ調整。 ○高台端部面取り。 ○貼り付け高台。 ○青染付。	S27 E9　南北溝 ○口径：12.1cm ○高：2.6cm
	130	○内弯して立ち上る体部。 ○直口。	○釉は比較的薄く均一。 ○青染付。	S33 E6　トレンチ拡張中　灰層 ○復元口径：13.0cm
碗	131	○体部は直線的に立ち上る。 ○直口。	○釉は口縁部外面でわずかに厚さを増す。他は比較的薄く均一。 ○青染付。	S6 W18　茶褐色粘質土層 ○復元口径：12.2cm
	132	○内弯して立ち上る体部。	○釉は比較的薄く均一。 ○削り出し高台か。 ○青染付。	S24 E18　茶褐色土
	133	○内弯して立ち上る体部。 ○比較的高い高台がつく。	○釉は比較的薄く均一。 ○高台端部は面取りを行なう。 ○碗底には銭形に「長禽冨貴」の文字有り。 ○貼り付け高台 ○青染付。	S21 E15　Pit
	134	○内弯して立ち上る体部。	○釉は比較的薄く均一。 ○碗底に篦削りの痕跡有り。 ○高台端部に面取りを行なう。 ○碗底には手描で印形に「□□佳器」の文字有り。 ○貼り付け高台。 ○青染付。	S15 E15　砂礫層

(2) 伊丹城跡第3次調査出土銭貨一覧表

番号	名称	初鋳年代(西暦)	外径(cm)	出土層位	保存状況	備考
1	開元通宝(開通元宝)	唐 武徳4年(621)	2.4	S24 E12 茶褐色土	緑青をふき腐蝕著しい	
2	開元通宝	唐 武徳4年(621)	2.5	S15 W6 トレンチ石垣前(伊丹氏)	緑青。磨滅著しい。欠損はなはだしい	
3	祥符通宝	北宋 大中祥符元年(1008)	2.5	S27 E12 表土	腐蝕著しい一部欠損	
4	天禧通宝	北宋 天禧年間(1017～1022)	2.5	S33 E15 黄褐色粘質土	磨滅著しい	
5	天禧通宝	北宋 天禧年間(1017～1022)	2.5	S18 E12 土壙内、黒色攪乱土	磨滅著しい	
6	天聖元宝	北宋 天聖元年(1023)	2.5	S24 E12 茶褐色土	緑青をふき腐蝕著しい	
7	皇宋通宝	北宋 宝元2年(1039)	2.5	S24 E12 黄褐色泥砂	緑青。磨滅著しい	
8	皇宋通宝	北宋 宝元2年(1039)	2.4	S24 E12 黄褐色砂泥(焼土層の上)	緑青をふき腐蝕著しい	
9	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	2.5	S21 E25 黒褐色粘質土	残存状態良好(攪乱埋土?)	
10	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	2.4	S24 E15 褐色層	腐蝕著しい	
11	元豊通宝 ? ? ?	北宋 元豊元年(1078)	2.5	S27 E12 表土	腐蝕著しい	
12	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	2.4	S27 E9 褐色砂礫層	磨滅しているが割合い残存状態良好	
13	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	2.4	表採	磨滅しているが割合い残存状態良好	
14	元祐通宝 ?	北宋 元祐元年(1086)	2.5	S27 E15 表土攪乱土	腐蝕著しい	
15	元祐通宝	北宋 元祐元年(1086)	2.4	S27 E18 黄褐色土層(南北溝南側)	磨滅著しい	
16	洪武通宝	明 洪武元年(1368)		S24 E15 焼土層(溝内)	緑青をふき、欠損はなはだしい	
17	永楽通宝	明 永楽6年(1408)	2.5	S27 E12 焼土層	残存状態良好	
18	無文銭		2.3	S24 E12 焼土層	緑青をふき腐蝕著しい	
19	寛永通宝	寛永元年(1624)	2.3	S21 E6 茶褐色土	弱干磨滅しているが割合い残存状態良好	
20	文久永宝	文久3年(1863)	2.7	S18 W6 土壙内	緑青をふくが残存状態良好	
21	□□□宝		2.4	S27 E9 褐色砂礫層	腐蝕著しく、孔部一部欠損	「熙寧元宝」(1068)?
22	不明		2.5	S24 E12 茶褐色土	緑青をふき腐蝕著しい	
23	□□通宝		2.5	S33 E15 表土	緑青をふき腐蝕著しい	
24	□□□宝		2.6	S18 E9 茶褐色土	磨滅著しく欠損はなはだしい	

図4　土師質土器・瓦質土器

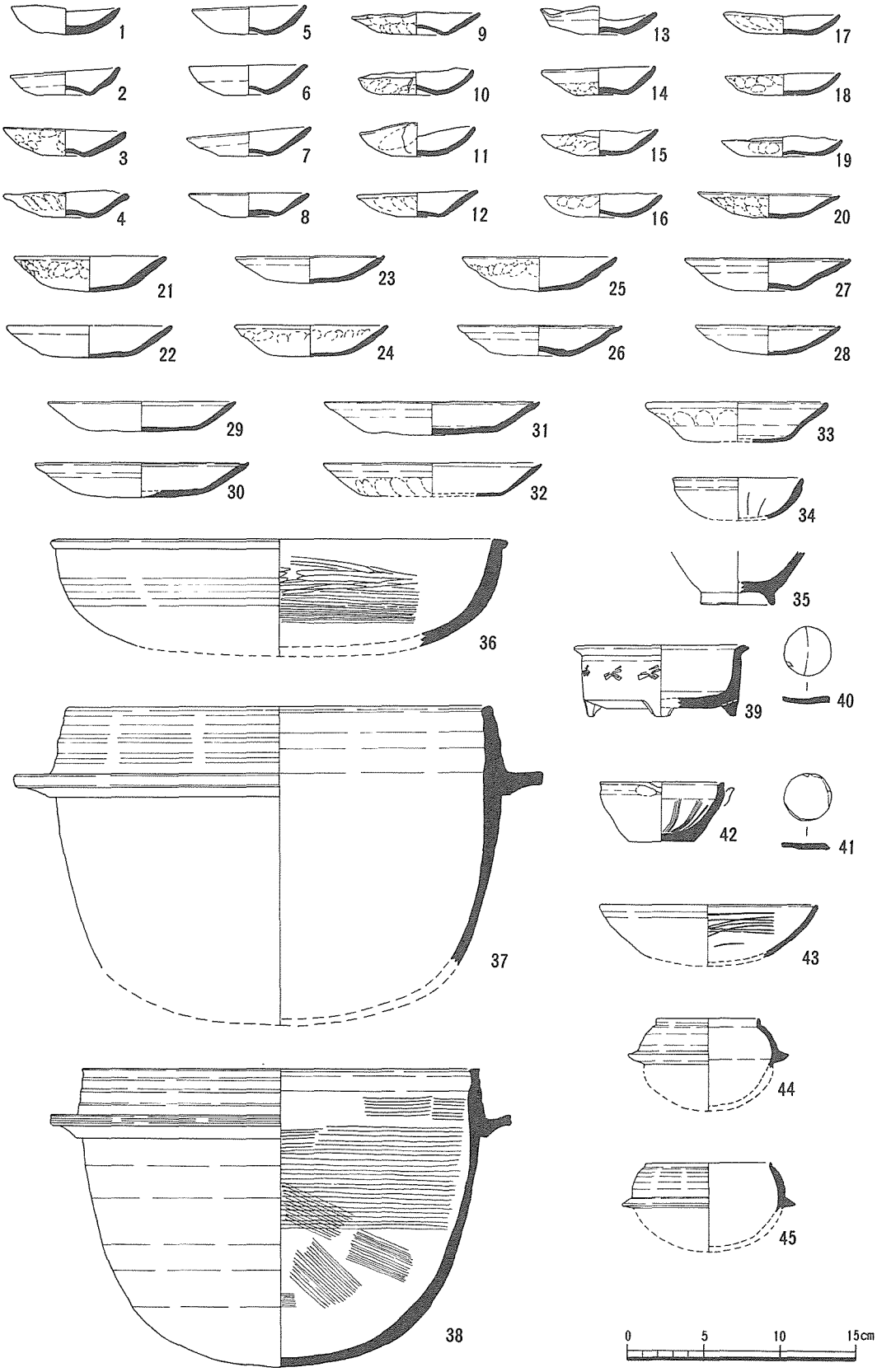


図5　土師質土器・瓦質土器・陶器

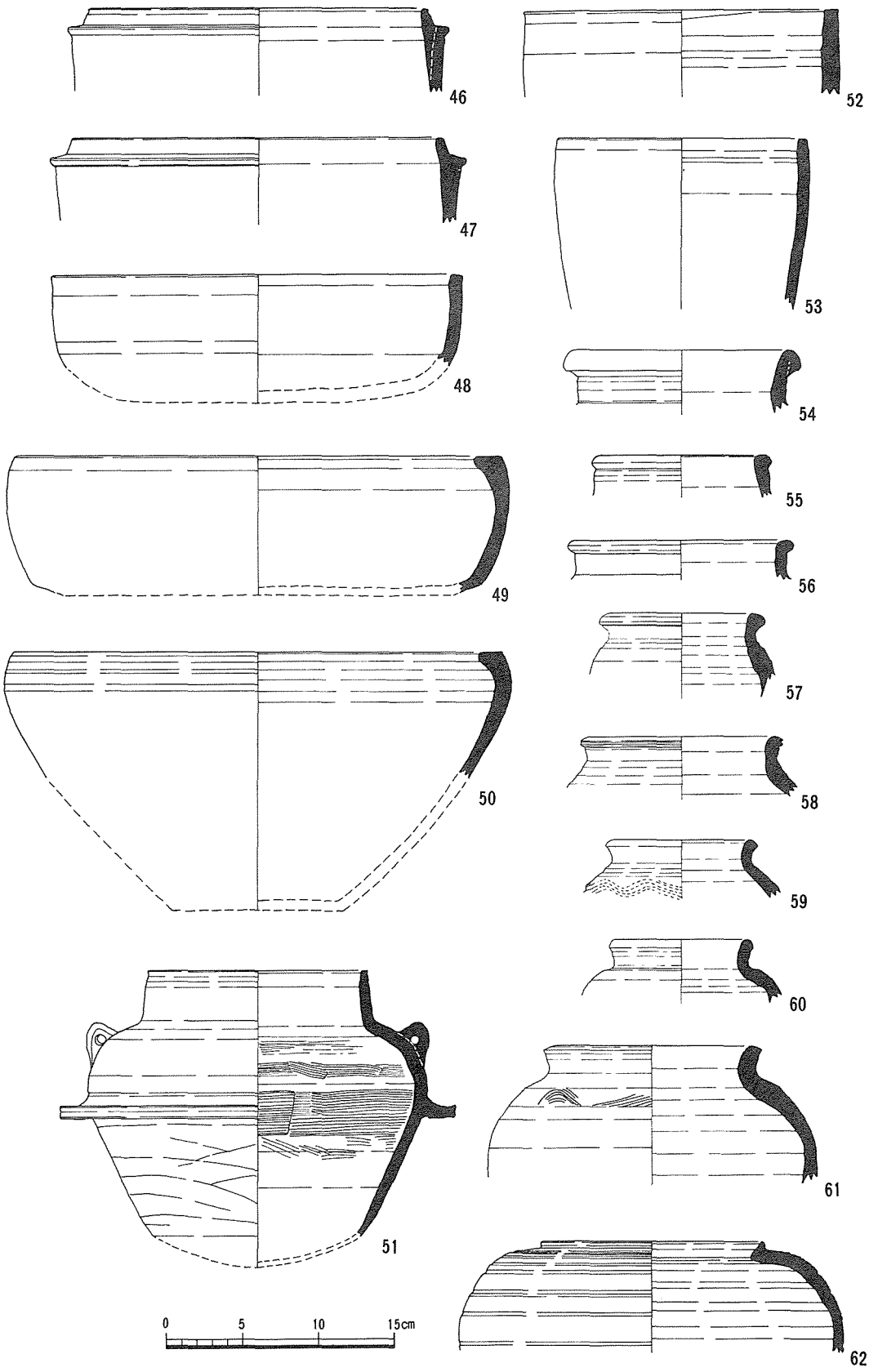


図6 陶器

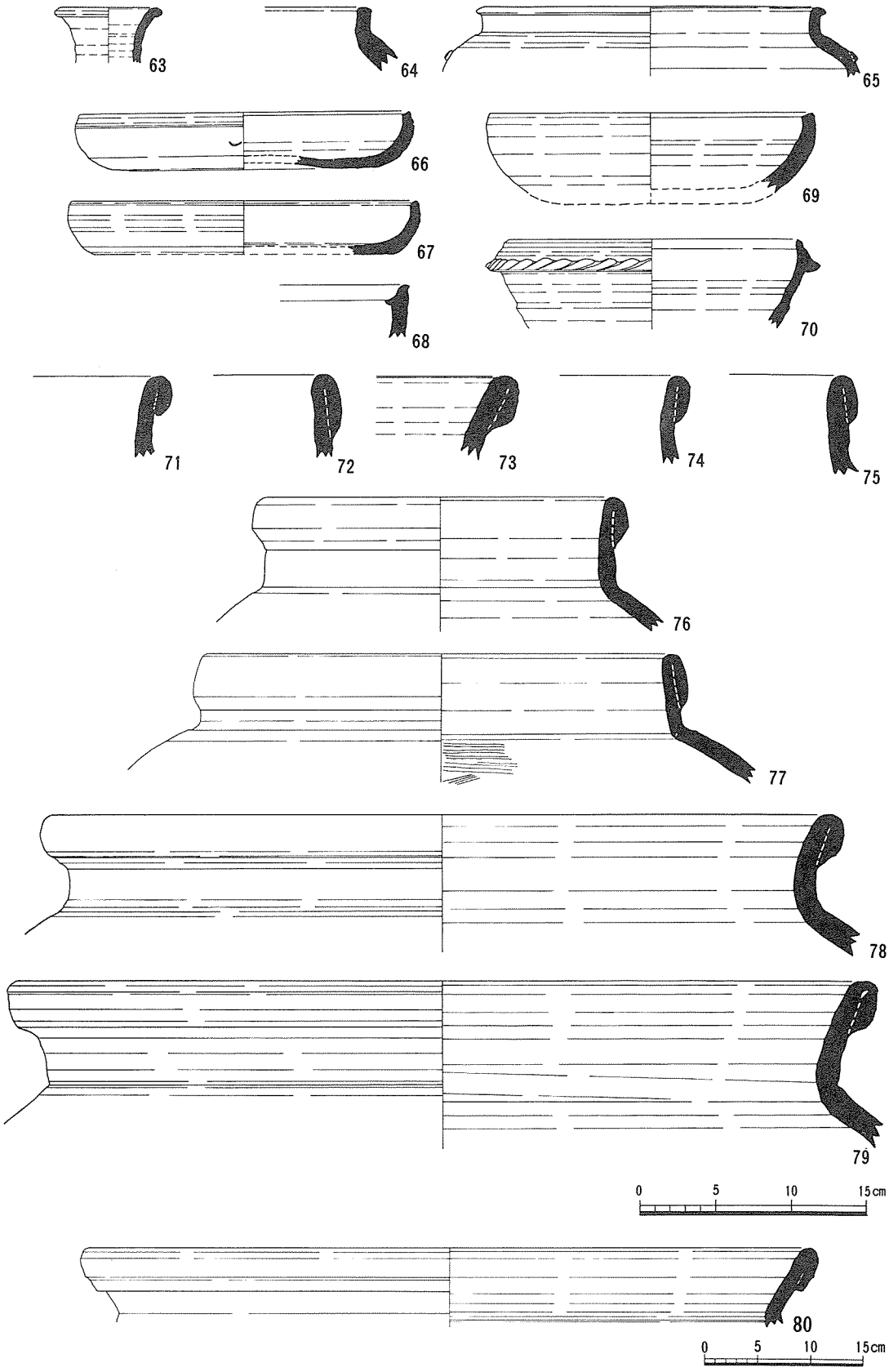

63
64
65
66
69
67
68
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
0 5 10 15cm
80
0 5 10 15cm

図7　陶器

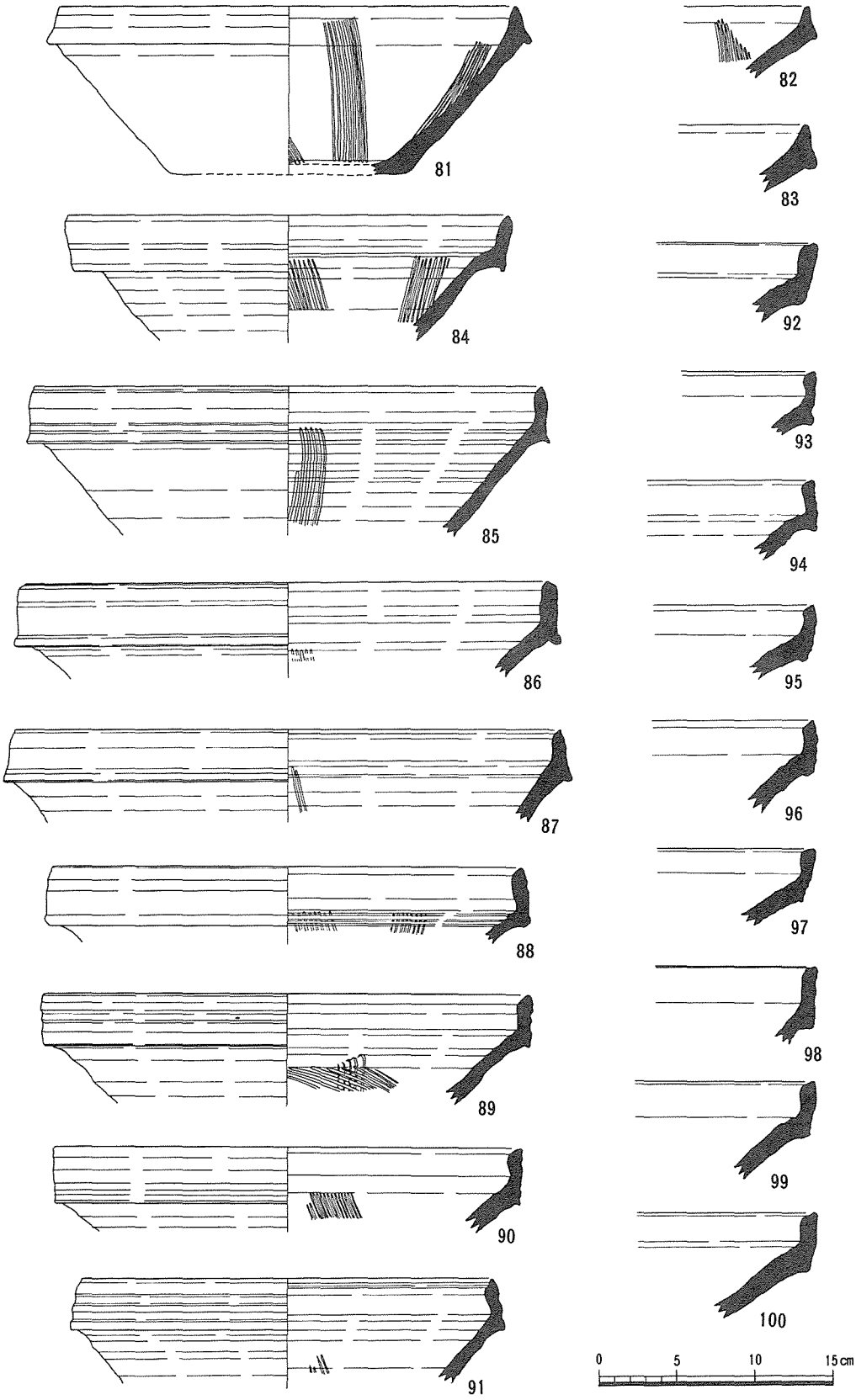


図8 陶器

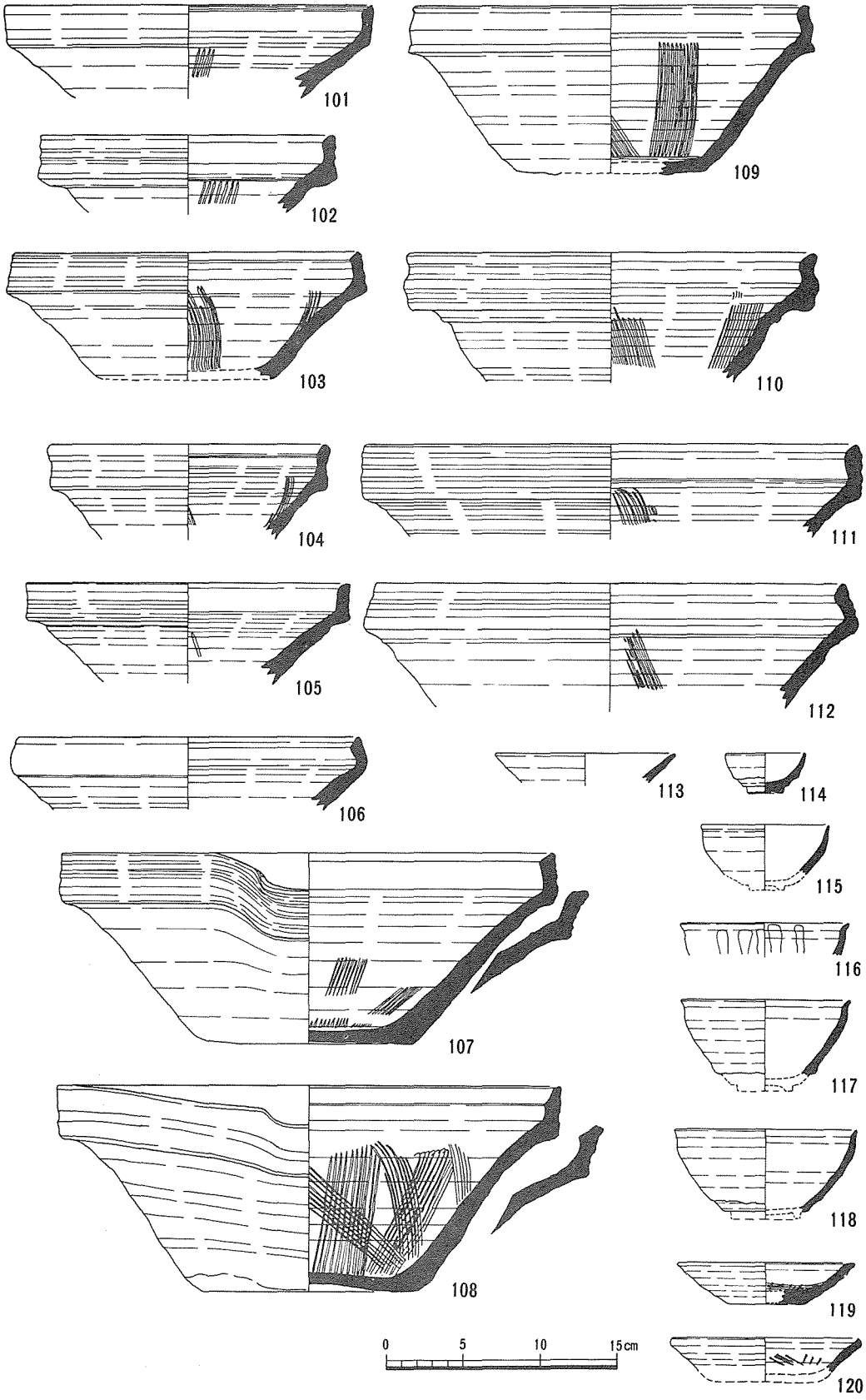
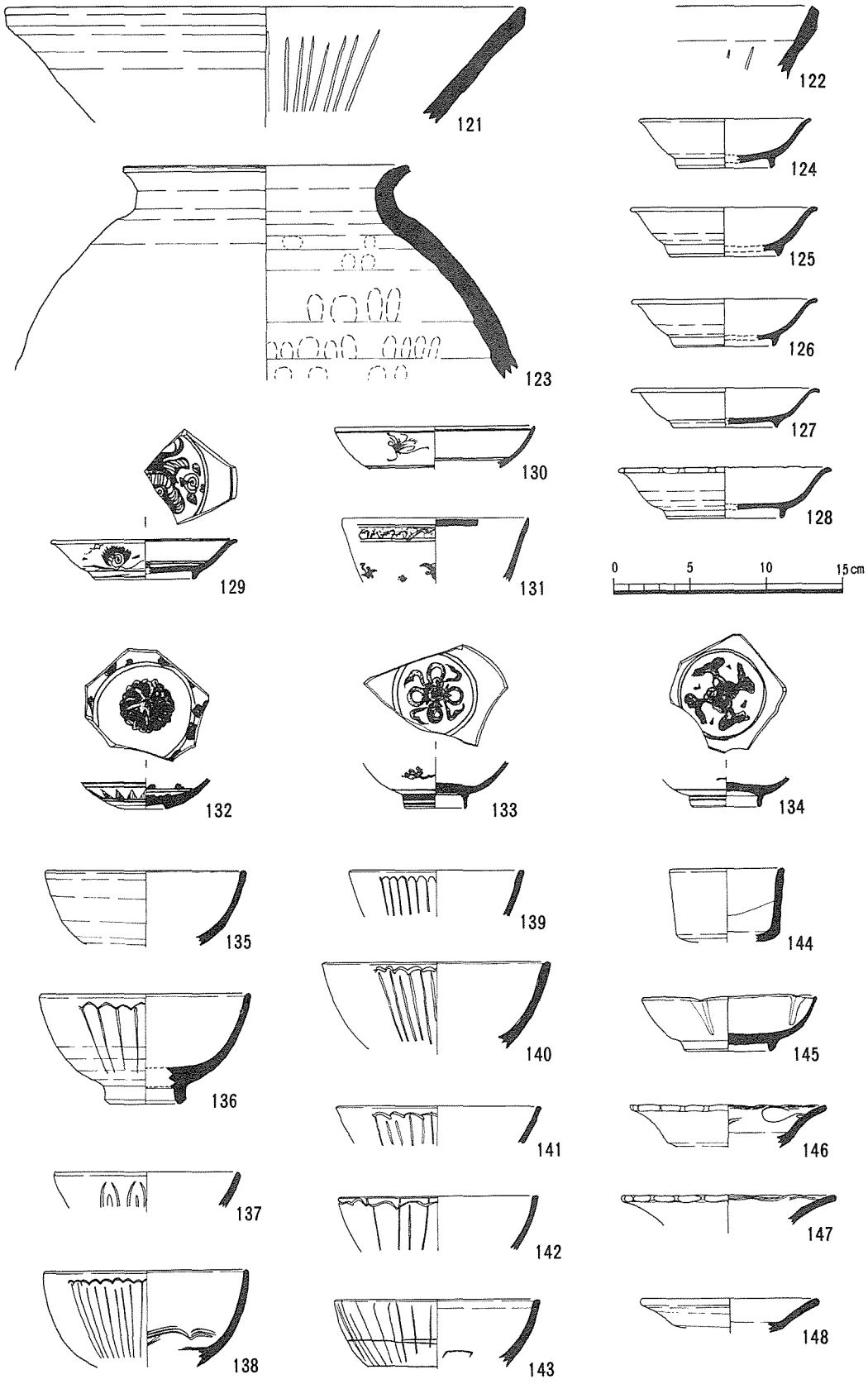

101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
0
5
10
15cm

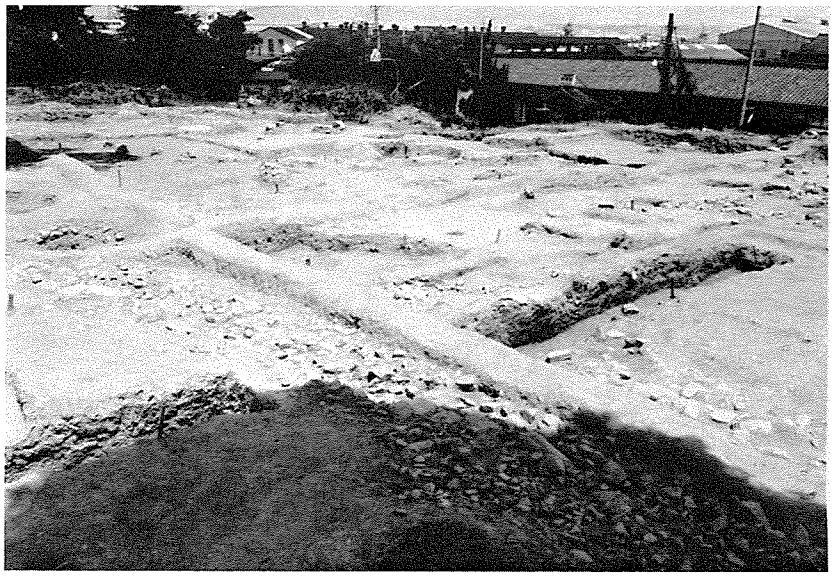
図9 陶器・磁器


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
0 5 10 15cm
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148

図版1　西郭全景（南より）

図版2

西郭南東部
（西より）



西郭北東部
（西より）

西郭の洲浜
（北より）

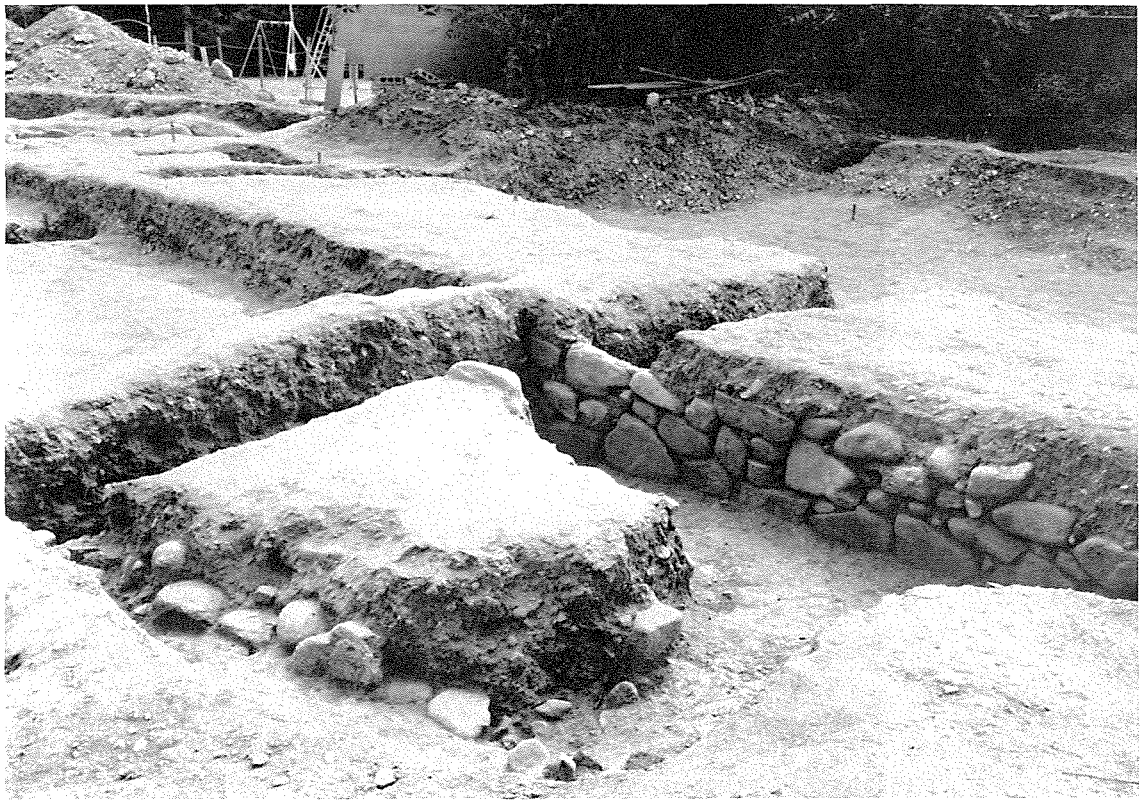
土墨土留北端
（西より）

土墨土留
（北より）

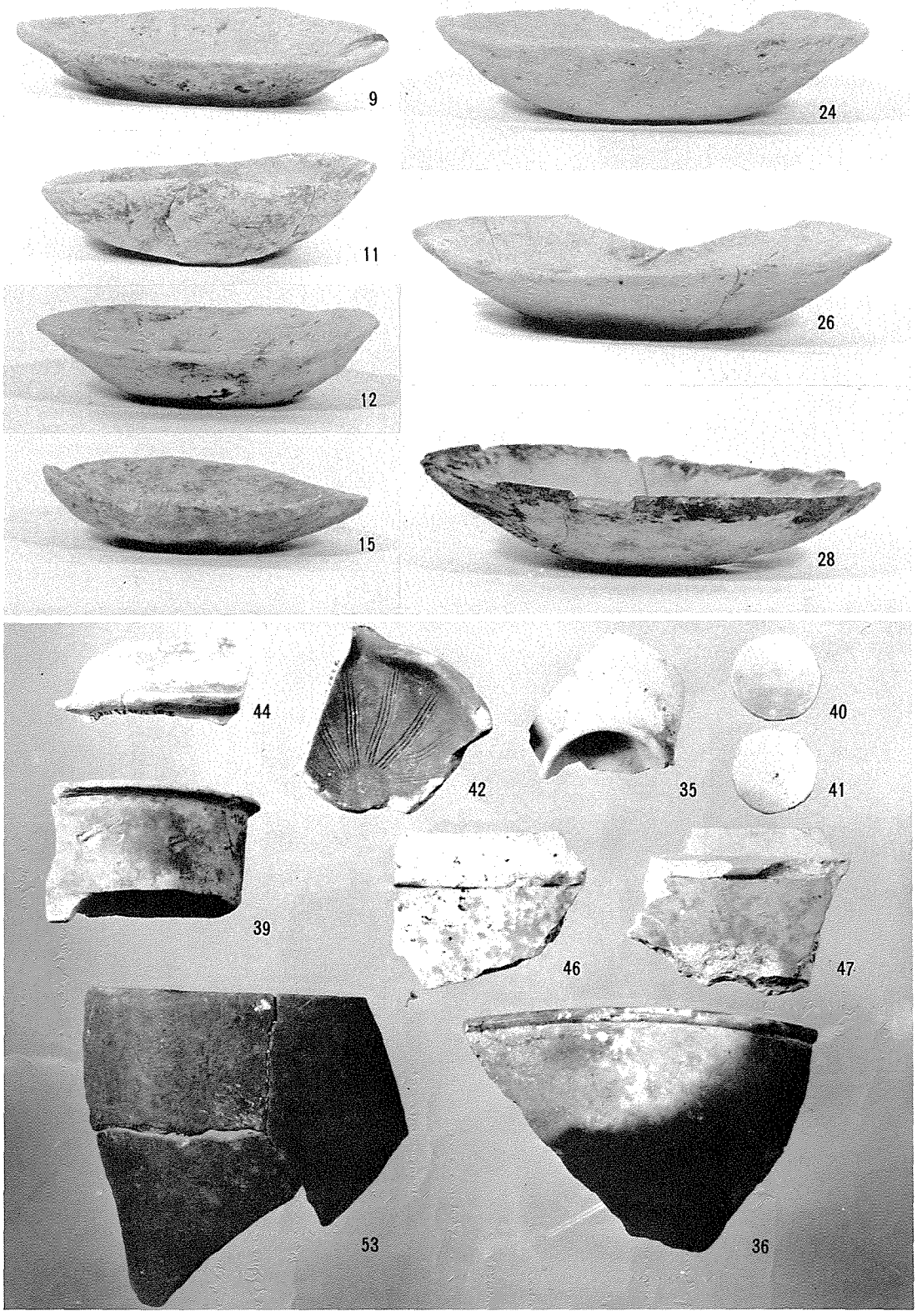
北東部の池状の落込
（北より）

図版4

南西隅の土留土留石（東南より）

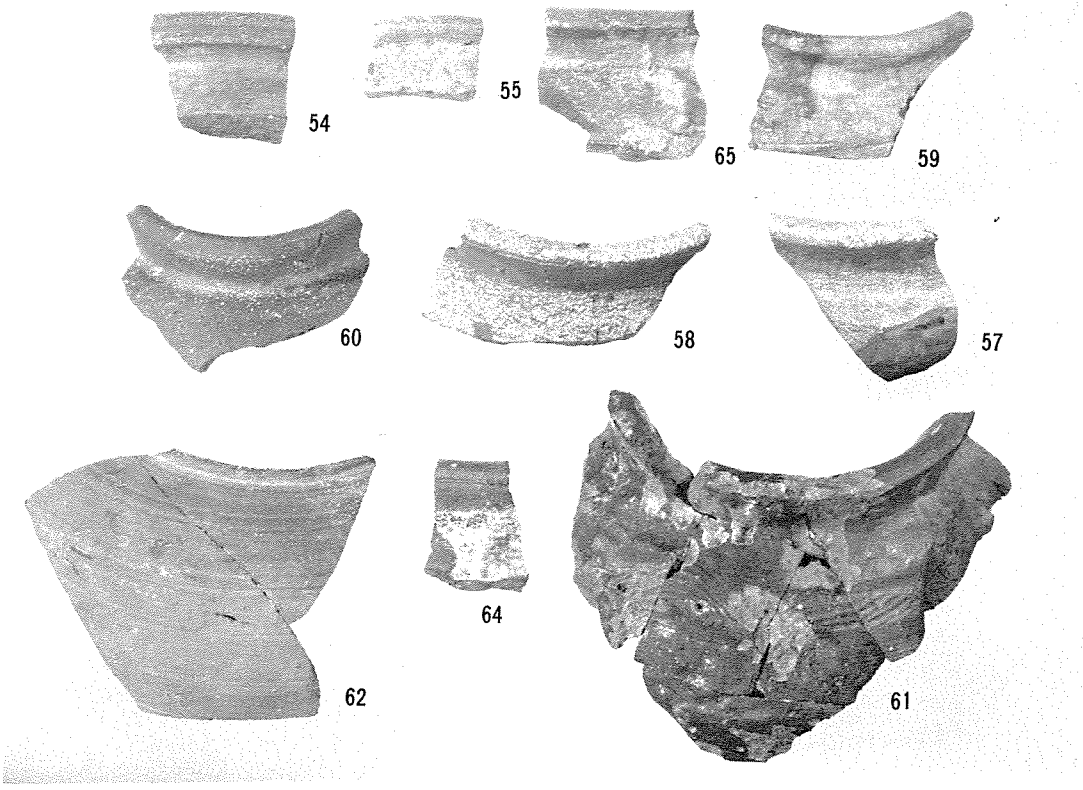


土留の石垣（東より）

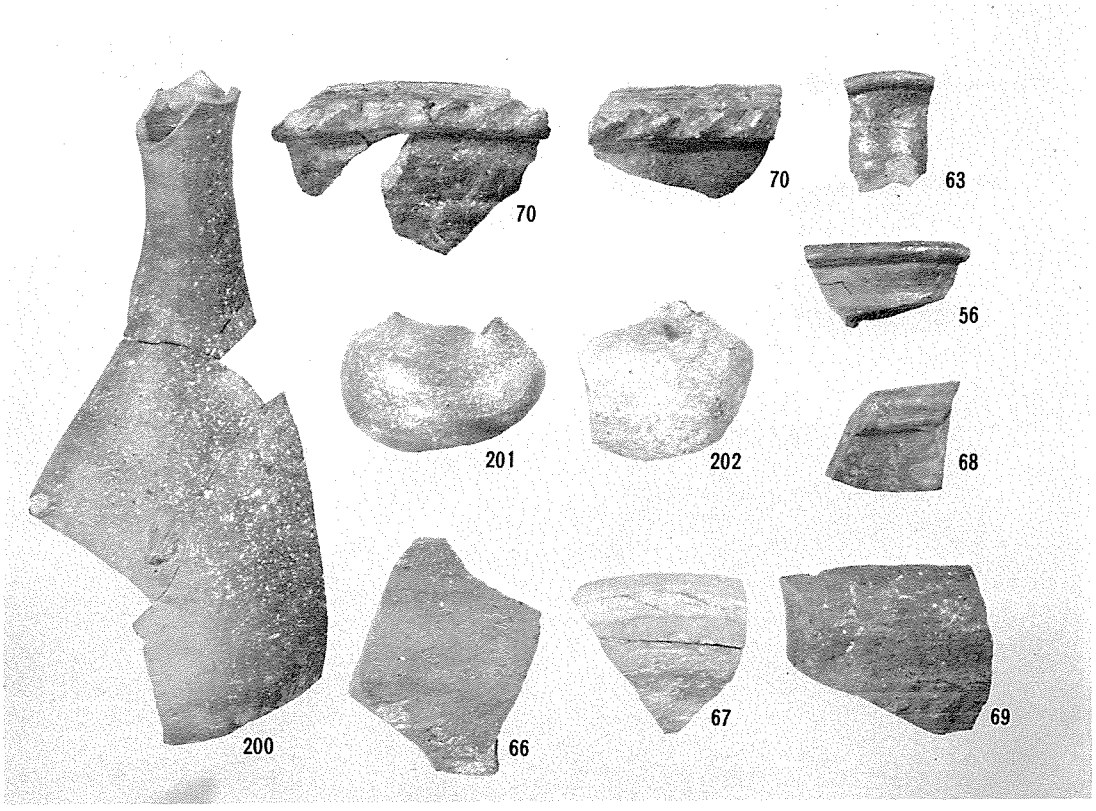


土師質土器、瓦質土器

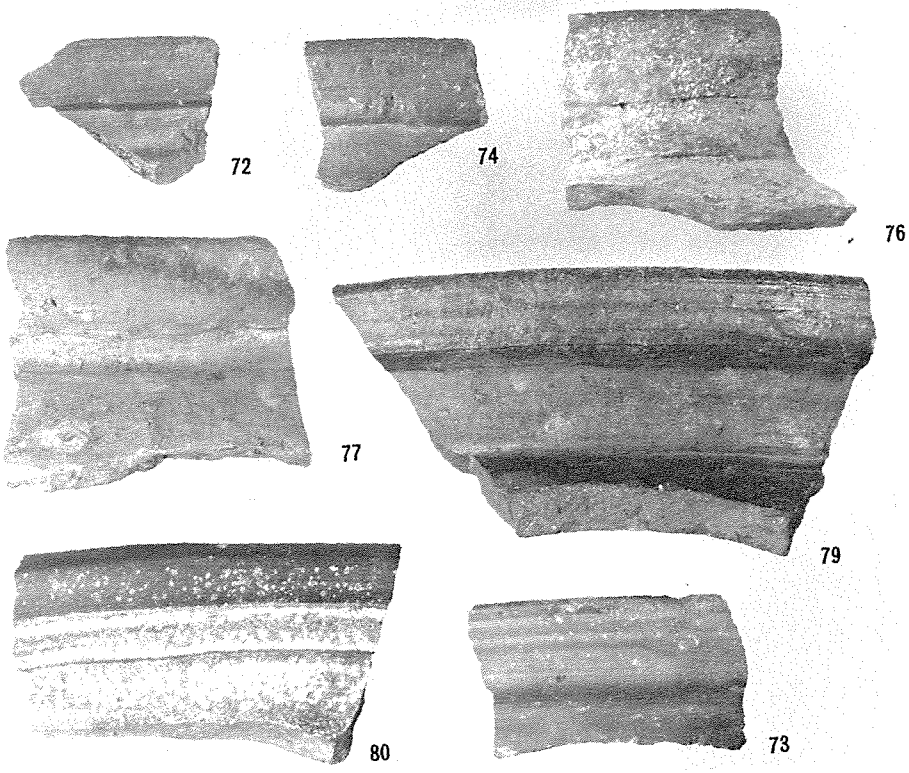
図版6



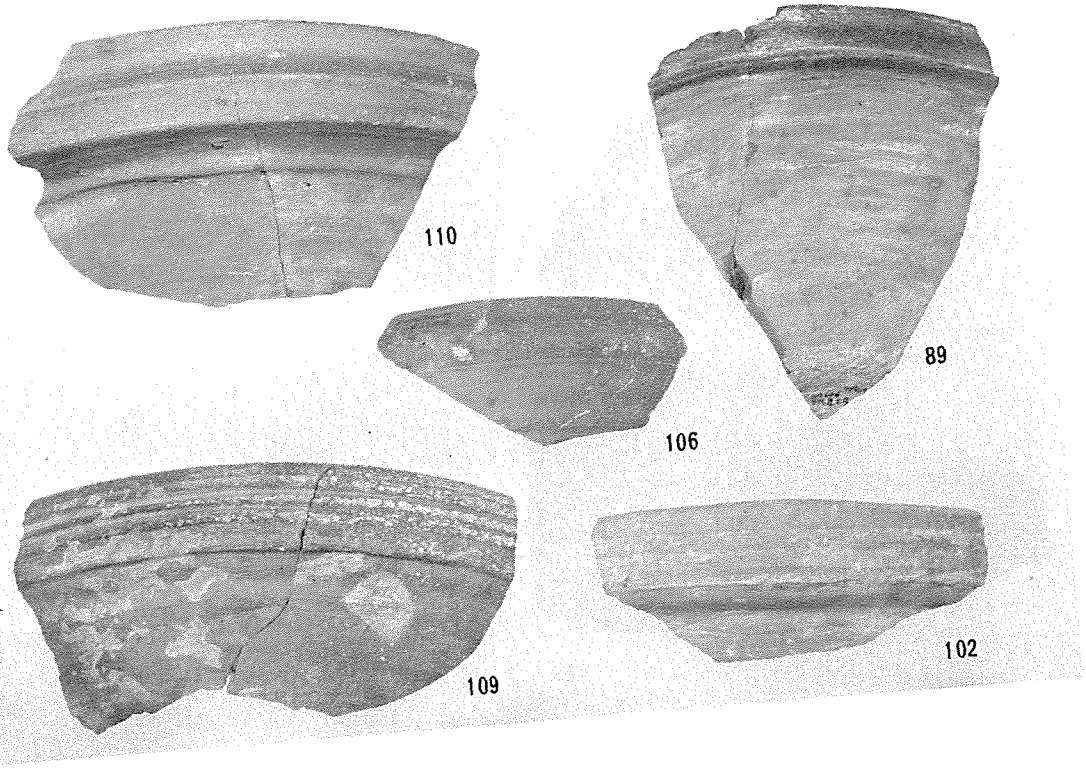
備前焼　壺



備前焼　壺

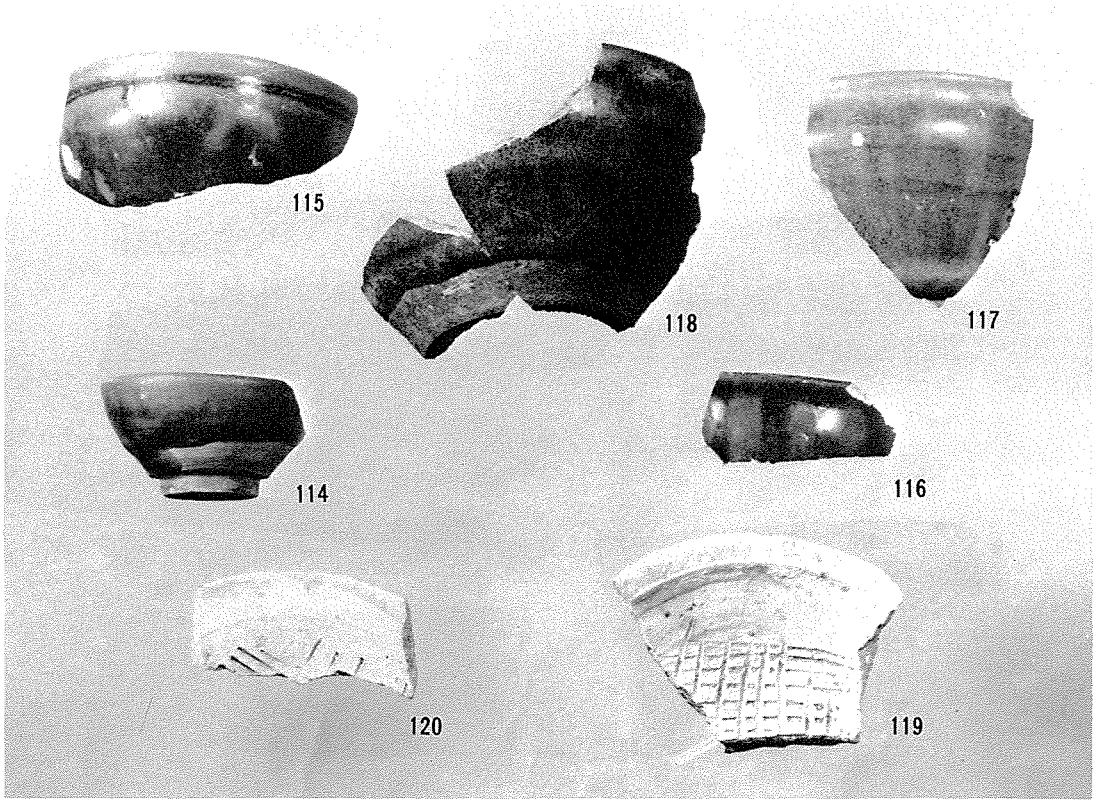


備前焼　甕

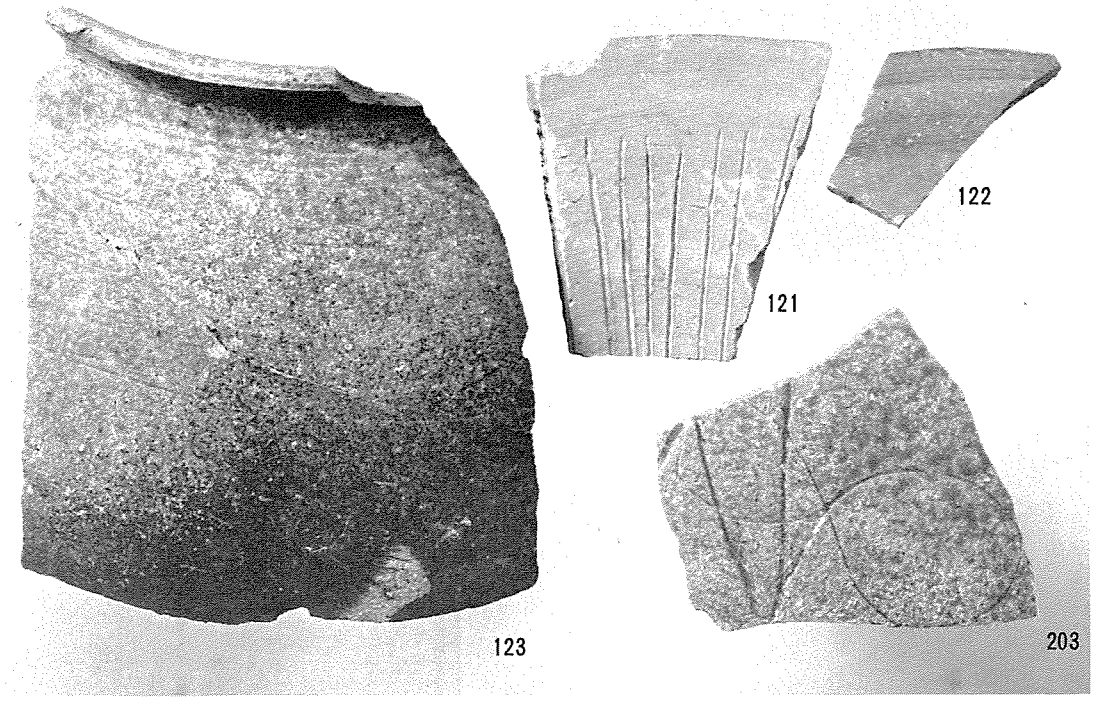


備前焼　擂鉢

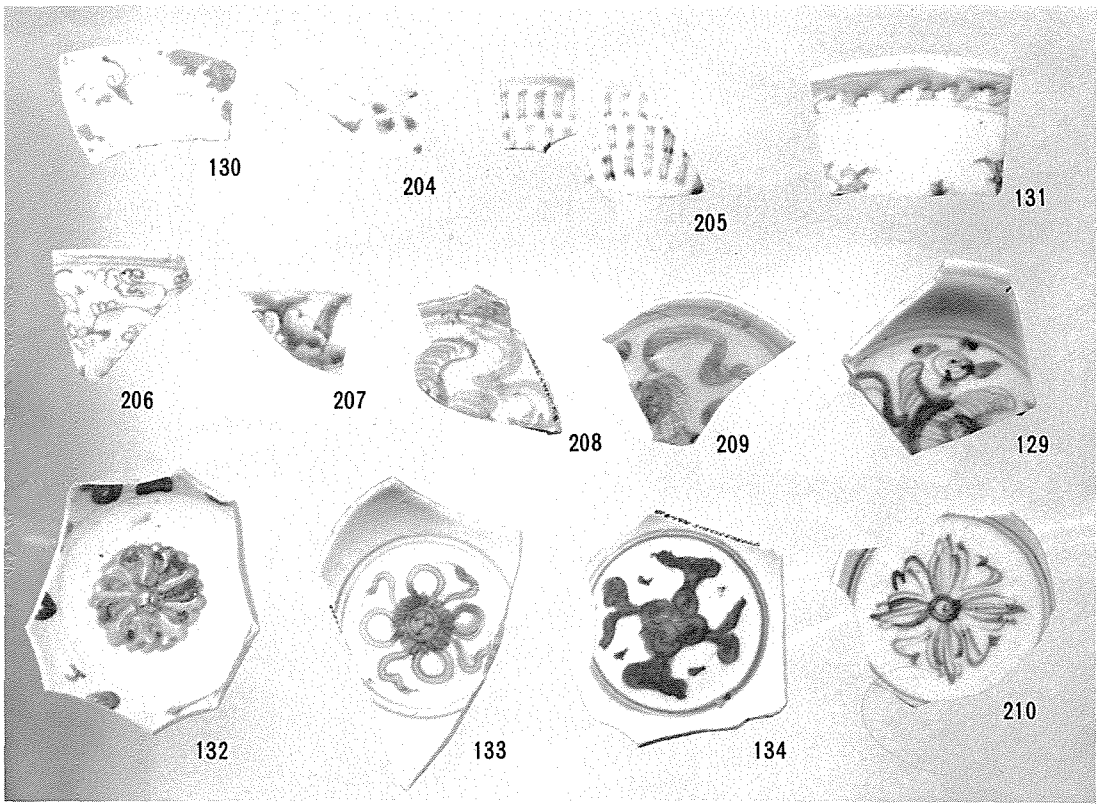
図版8



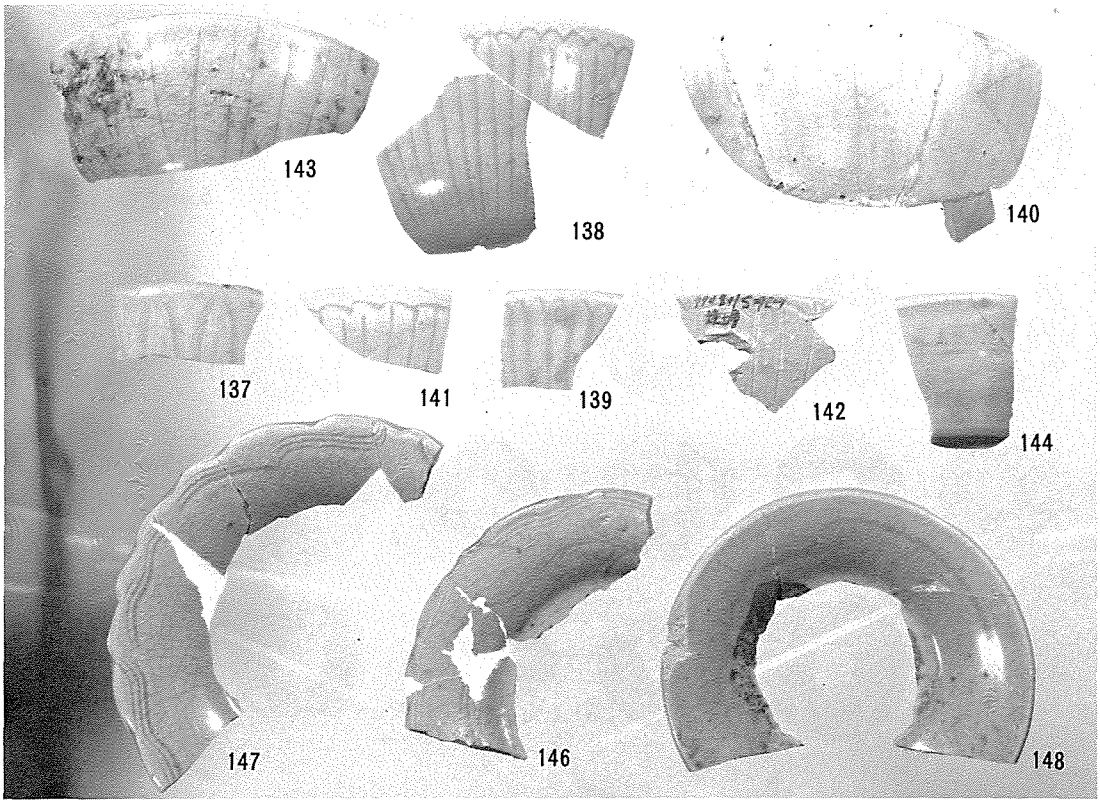
瀬戸焼　天目、おろし皿



丹波焼　甕、擂鉢


130
204
205
131
206
207
208
209
129
132
133
134
210

明染付


143
138
140
137
141
139
142
144
147
146
148

青磁